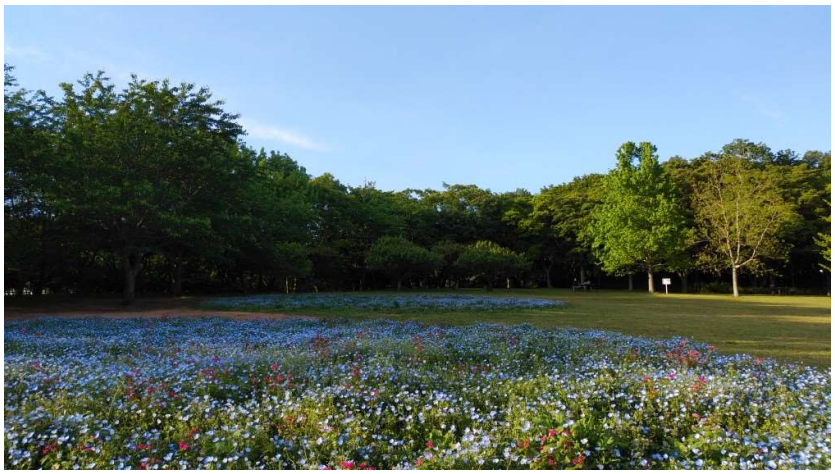
－文 芸－

草の丘

第 20 号



2021 年 6 月 印旛文学の会

URL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/

文芸

草の丘 第二十号（二〇二一年 六月）

目次　草の丘 第二十号

《詩》
幸せの形 ほか　中川 とら ……一
時は過ぎて　安達 真魚 ……三
《小説》
道長と伊周　畑中 康郎 ……七
不条理な景色 ―その一、かわいそうなお父さん―　中川 とら ……一五
《エッセイ》
千葉ニュータウンでの時間感覚 ―その3―　安達 真魚 ……二〇
映画とテレビドラマ三篇の感想　畑中 康郎 ……三二
《連載小説》
伊能忠敬と四人の妻 ―第四回―　香取 淳 ……四五

幸せの形

中川とら

あなたの好物は
わたしのそれとは違う
あなたに出来ることが
わたしに出来るとはかぎらない
あなたの家族が
やさしい人々だとしても
わたしの家族が同様とはならない

だからといって
満足気に笑うあなたを
うらやんでみて何になろう

ならば、思い切り自分の道を耕そう
長い人生
わたし達が互いに得た収穫を
分け合い、涙を流して喜び合うほうが
はるかに楽しい

◇

心配なんかいらない

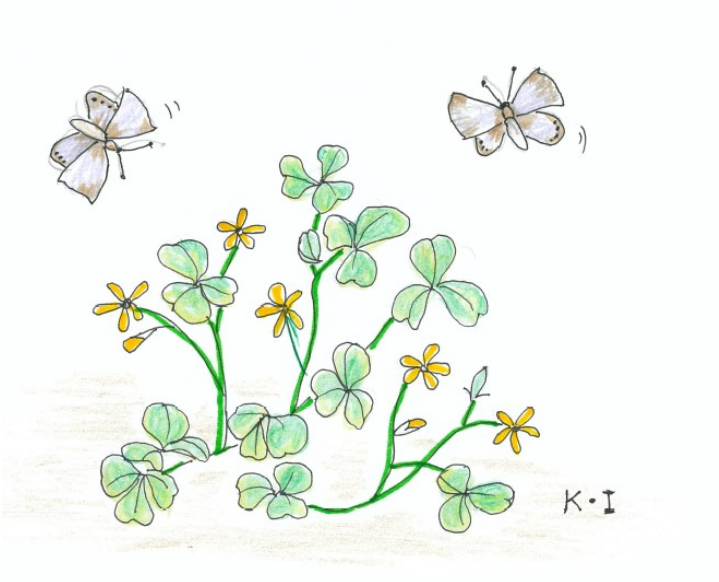
一、何も言いたくない時がある
　そばに君がいなくても気にならない
　心配なんかしなくていいよ
　ぼくは今少し、休みたいだけなんだ

二、何も考えたくない時がある
関心のあることも特にないんだ
そんな顔で見ないでよ
ぼくは今少し、休みたいだけなんだ

三、何も見たくない時がある
騒々しい風景はもううんざり
話しかけてくれなくていいよ
ぼくは今少し、休みたいだけなんだ

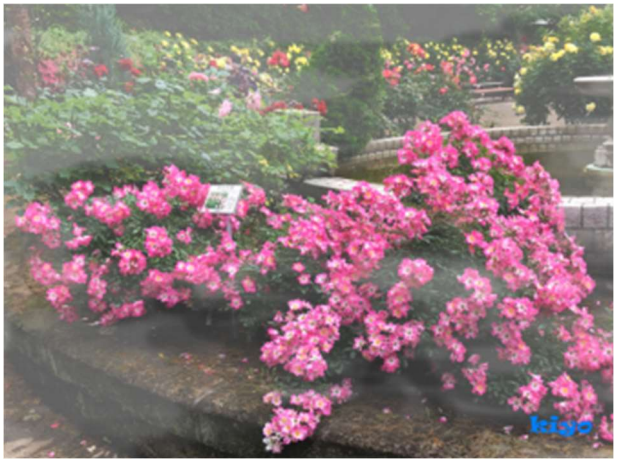
しばらく　じっと止まって
呼吸を整えたいと想ってるだけさ

◇



時は過ぎて

安達 真魚



ピンクの薔薇（市川市里美公園）

Infection

気づかないままに　忍び寄る
空気の中に　同化する
吹きすさぶ烈風　ウーデーモン
怪しげな　悪魔　ウーデーモン

Internal storm　infection

絡み合う体　交じり合うリキッド
蝕まれた知能　君を拒めない

変わらない街の　昼下がり
ただよう影に　立ちすくむ

荒れ狂う烈風　ウーデーモン
狡猾な　悪魔　ウーデーモン

Internal storm　infection

魂を奪う　いたずらな誘惑
突然の変異　ひとり歩き出す

Internal storm　infection
闇のなかに　消えていく

Planet Blue

Planet Blue　Planet Blue　Land of The World
Planet Blue　Planet Blue　Shining of The Sea

回り続ける　静寂な世界

過去　未来　限りない時の刻み

そして、今

この空、この川、この海の青さ

ささやかな時間　この世のエビデンス

しじまの綺羅星　いつまでも回り続ける

Planet Blue　Planet Blue　広がる台地

Planet Blue　Planet Blue　かがやく海原

静かに時を刻む　果てのない世界

過去　未来　静かに時を刻む

そして、今

この命、この奇跡、このめぐり合わせ

わき上がる雲は　形を変えていく

すべて生まれては　消え去っていく

Planet Blue　Planet Blue　広がる台地

Planet Blue　Planet Blue　かがやく海原

Planet Blue　Planet Blue　Land of The World

Planet Blue　Planet Blue　Shining of The Sea

Silent Click

Silent Click　Silent Click
Silent Click　Silent Click
少女の泣き声　聞こえる彼方から
どこから来て　どこへ行くのか

忍び寄る影　音のない世界
息を潜めた　悪魔のように
Silent Click　Silent Click
時をとめたい　時は止まらない
時を戻したい　時は戻らない
愛し合った時間（とき）　華やかな瞬間
時の流れは　全てを変えていく
Silent Click　Silent Click

ワーキング・ガール　街角を駈け抜ける
どこから来て　どこに帰るのか
そよ風のように　気づかないままに
このひとときは　一瞬だけの輝き
Silent Click　Silent Click

時をとめたい　時は止まらない
時を忘れたい　時を葬りたい
美しい時間（とき）　華やかな瞬間
いつしか君は　朽ち果てていく

道長と伊周

畑中康郎

この世をば我が世とぞ思ふ望月の
　欠けたることもなしと思へば

この歌は藤原道長が、五十三歳のときに詠んだものだ。十世紀末から十一世紀初めの平安時代。権勢並びなきを誇り、天皇を陰で操って摂関政治の頂点を極めた人物である。その時点の道長を見ると、長保二年（一〇〇〇）に長女の彰子（しょうし）を一条天皇の中宮（皇后と同格）と為し、次いで長和元年（一〇一二）には二女の妍子（けんし）を三条天皇の中宮にする。そして寛仁二年（一〇一八）には三女の威子（いし）を後一条天皇の中宮に据えた。三人の女（むすめ）を三代にわたって天皇の中宮にしたわけだから、その権力は正に空前絶後である。さらに後一条天皇は彰子の子であり、道長から見れば孫、つまり外祖父にまでなったのだ。

寛仁二年十月十六日、威子を中宮に据えた立后式の後の

ことである。道長は私邸土御門殿に貴族たちを集めて祝賀式典を催し、その後宴会となった。貴族たちのほとんどは道長の権勢におもねる者ばかりであったが、その中で勇気ある大納言藤原実資（さねすけ）だけは独り是々非々の立場を貫くことが多かった。道長はそんな実資を不快に思っており、いっそこの機会に辱めてやろうと考えた。咄嗟に考えたことが歌を詠むことであった。

彼は実資の傍らに来るなり、「歌を詠もうと思う。即興で君にも詠んでもらいたい。まず私の方から詠んでみるから返歌をよろしく」と、持ちかけた。歌については貴族の嗜みとして実資も不得手ではない。だから少しも気後れはしなかった。

ところが、そのとき道長の詠んだ歌が冒頭に挙げた歌である。あまりに大胆で傲慢な歌であったため、実資は唖然として二の句が継げなかった。その慢心に驚き、かつその勢いに屈したため、返歌の気分が一気に損なわれた。

「これほどの歌に対して、私のような者では返歌などとてもできるものではありません」

道長は誇らしげに胸を反らし、実資を見下すようにフンと鼻を鳴らした。それから会場の貴族たちを睥睨した。一方、実資は冷静だった。少しも悪びれず、道長の歌を列席していた貴族たちに要請して全員で数回にわたって吟詠させたのである。道長の自尊心を大いに満足させたことは言うまでもない。

だが、実を言うと実資のこの対応は、唐の詩人元稹（げんしん）が作った、あまりに見事な詩に感嘆した白楽天が返歌をもって応えられず、彼の詩を吟詠したという故事（実資の場合は、やや様相が異なるが）にならったものであった。その故事を、道長も貴族たちも誰一人として知らなかった。

しかし、これほどの絶頂にあった道長も若い頃は野心だけが先走る、権力とは無縁な青年であった。彼は関白藤原兼家の子息だが、嫡男ではない。しかも四男である。とても関白の地位を継ぐ立場になかった。兼家を継いだのは嫡男の道隆であったし、道隆の次はそのまた嫡男の伊周（これちか）に決

まっていた。道長の従弟である。
伊周は彼よりも八つ年下であったが、父・道隆の後ろ盾もあって順当に出世を遂げていた。十八歳にして参議、十九歳で大納言になって道長に並び、二十歳にして道長を抜いて内大臣になった。道長は悔しくて仕方なかった。何としても這い上がり、いずれ関白になりたいと思った。が、伊周という存在がある以上、こればかりはどうしようもない。
この思いを伝えるエピソードがある。あるとき道隆、伊周の親子が屋敷で弓射を楽しんでいたとき、ふと現れた道長が伊周との弓の競争になった。そして力一杯に弓を引き、道長はこう叫んだ。
「私が摂政関白になれるとしたなら、この矢は必ず当たる。矢よ、当たれ！」
関白道隆と伊周の面前で何の気後れ、迷いもなく言った。すると矢はずばり的を射抜き、恐れを抱いた伊周の弓は的を大きく外してしまったと言われる。
道長はこのように万事強気な男だったし、何かやりそうな雰囲気を生来持っていた。

道長の運命が開けたのは、左大臣・源雅信の娘倫子（りんし）との結婚である。雅信は当初、倫子を天皇の后にしたかったからこの結婚には反対であった。道長が摂関家の出ではあっても関白には手の届きそうもない四男であることを理由に、当初、彼を過小評価していた。しかし道長の運は強い。道隆以外の二人の兄はいずれも早世したから、道隆にもしものことがあれば、道長に関白の可能性も出てくると思われた。
道長との結婚に積極的だったのは、倫子の母親穆子（ぼくし）である。彼女をその気にさせた伏線がある。常日頃から道長の穆子に対する夥しい贈り物であり、穆子の自尊心をくすぐる気遣いと優しさだった。大胆にして細心、大きなことをやりそうな反面、人の気持ちを大事にできるきめ細やかな側面もある男なのだ。穆子の方も道長の日頃の言動から将来性を予測し、彼に関する情報収集を怠らなかった。そして結論を出した。

「この君、ただならず見ゆる君なり」と言って、最後には夫を説得したのである。

これに対し、伊周は女性を利用して出世する気はなく、純粋で真っ直ぐな男だった。

「俺は男で、器量もあるし度量もある。学問も素養も叔父の道長と比較してより以上にある。妻の実家に頼って出世などするものか。俺は自分の力で出世してやる」と思い、そのことを周囲にも語った。二十歳にして高い地位にあった伊周の当然の自信とも言えよう。

道長がこの結婚で得たものは非常に大きかった。強力な保護者となる雅信の存在であり、莫大な資産である。資産としては八千七百坪という広大な土地と屋敷を譲り受けた。現在の資産価値に換算すると約百七十億円に相当すると言う。また出世競争の面では、雅信が左大臣としての権力で道長を後押しした。

一方、伊周は権大納言・源重光の娘と結婚はできたが、重光が別の娘に邸宅を譲ってしまい、何も手にできなかった。重光夫妻は伊周が気に入らなかったのである。気位が高く、傲慢だったから人を人と思わない。これが災いした。出世についても、重光は雅信ほどに熱心に考えなかった。どうせ関白道隆の嫡男であれば、黙っていても関白を継ぐものだからである。

しかし、出世競争はどう転ぶかわからない。長徳元年（九九五）、伊周二十二歳のとき、最大の後ろ盾だった父・道隆が四十二歳で死んでしまった。その年の春から夏にかけて、はしかとも天然痘ともいわれる流行病が都周辺を襲ったのだ。これにより、権大納言以上の地位にあった道隆をはじめ貴族六人が一度に世を去った。権大納言以上で生き残ったのは、内大臣の伊周と権大納言の道長だけであった。出世競争の相手が一度にいなくなったことは道長にとって願ってもない幸運である。なかでも長兄の関白・道隆の死が道長にとっては最大の幸運だった。道隆の死因は糖尿病で流行病ではなかったが、運が開けたことに違いはない。

道隆に代わり、政界最高位を争うのは道長と伊周に絞られたが、道隆は死の直前、政権の座を息子伊周に譲るべく内覧の地位に押し上げていた。内覧とは、天皇と太政官の間で奏聞・奏下される文書を事前に内見する地位である。摂政関白に最も近い役職であったから、世間では伊周が関

白に就くのは間違いないと囁かれていた。
ところが、道隆が死ぬと一条天皇の指示により伊周は内覧から外された。内覧は道隆の病の間だけということになったのだ。道長の画策である。姉の皇太后詮子（せんし）を動かし、詮子から一条天皇を説得させたのだ。
しかし、その段階でもまだ伊周には有利な条件があった。なにしろ彼の妹が、天皇の最も愛する中宮・定子（ていし）だったからだ。定子と言えば、後宮に一大勢力を形成していて、そこに『枕草子』の作者清少納言もいた。教養の高い一条天皇が好む集まりと言っていいだろう。天皇はよくこの集まりにも来たから、伊周には定子を通じていくらでも天皇に近づく機会はあった。しかしその機会を十分に利用しなかったばかりか、叔母の詮子や叔父の道長の悪口を悔し紛れに言った。天皇にすれば、自分の母親を悪く言われるのは、正直、不快であった。
道長は陰謀にも長けていた。遡って、伊周が内覧の地位にのぼったばかりの同じ長徳元年七月、道長と伊周は宮中の会議の席上、些細なことから大喧嘩になった。売り言葉に買い言葉、それは話し合いなどと言うものではなく、相互に激しく罵り、つかみ合いとなった。いくら地位が高いとは言え、八つ年下の甥が叔父を罵倒する様子は見苦しい。宮廷の人々は一様に伊周を批判的に見た。それも道長の計算だった。
しばらくすると今度はどこからともなく、ある噂が聞こえてきた。伊周が宮中でしか行えない真言密教の秘法・太元帥法を用いて詮子と道長を呪い殺そうとしていると言うのだ。この噂で伊周の立場はさらに悪化した。これも道長の画策だった。
しかし、この噂に対しても、なお対処の仕方はあった。詮子や道長の機嫌を取り結ぶ謙虚な気持ちがあれば事態は好転したに違いないのだが、伊周は解決のための努力を怠った。それどころか、同じ頃、あろうことか先の天皇花山（かざん）院に向かって矢を放ったのである。伊周が恋に落ちていた鷹司邸の姫君に花山院が言い寄ったと思い込んだことが原因

であった。

結局、これも伊周の誤解で、実際に花山院が恋い焦がれたのは姫君の妹だったらしい。これも道長が故意に流した誤った噂を信じたために起きた事件である。

伊周は思い込みの激しい男だった。道長の好きなように、その手のひらの上で泳がされたと言えよう。その質は直情径行のうえ、思慮深くもない。どんなに高い恵まれた地位にあっても犯罪行為はご法度である。しかし甘やかされ持ち上げられ、崩すことができないほどに積み上がった驕りで自ら制御不能に陥り、ついには判断能力のない人間になってしまった。

これによって長徳二年、内大臣・伊周は責めを負って九州大宰府に流され政治生命を断たれた。中宮定子も髪を下ろし、仮出家した。だが、幸運だったことは一条天皇が彼女を心から愛していたことだ。定子を諦めきれず、しばらくして中宮の地位に戻したのである。

中央復帰が絶望視されていた伊周にも逆転の芽が出てきた。これが宮廷政治の甘さであろう。あれほどの罪を犯しながらも長徳三年（九九七）、エリート伊周は罪を赦され都に戻ったのである。それが再び運の開ける第一の出来事だった。そして二年後の長保元年（九九九）には、妹の中宮・定子に待望の男子が生まれた。それが幸運の第二である。生まれた親王が皇位を継ぐことになれば、伊周は天皇の叔父になり、権力を握ることになる。この変化に貴族たちは正直に反応した。権力者道長の下に昼間集まった後、夜になると今度は密かに伊周邸を訪れるようになった。

伊周の逆転の芽に対し、政権の座にあったとはいえ、まだ身内から天皇の世継ぎを出していない道長は焦りを覚え始めた。そこで、まだ十二歳になったばかりの娘彰子を一条天皇の中宮に差し出したのだ。天皇の子がどうしても欲しくなったのである。こうして、一人の天皇に中宮二人という異常事態を道長が強権で現出した。

ところが、現実は道長の思惑通りには進まなかった。一条天皇は少女に過ぎない彰子の下にはなかなか訪れない。一計を案じたのが、清少納言に対抗する教養に溢れた女性たちの集まる社交場の形成である。琵琶が弾け、和歌を詠い、書をよくし、中国古典に精通し、漢詩も理解できる……。そんな女房たちを彰子の周囲に置いたのだ。例えば、

『和泉式部日記』で有名な和泉式部、式部の女で歌の名人小式部内侍、また『栄花物語』を書いた赤染衛門、それにあの不滅の文学『源氏物語』を完成した紫式部などである。歌が好きで教養にもあふれた一条天皇は、そんな女房たちと話がしたいし、次々と新たな展開を見せる『源氏物語』を読みたくて彰子の下を頻繁に訪れるようになった。すべて道長の計算通りである。

結局、彰子二十一歳のときに敦成親王が生まれ、長じて後一条天皇となる。一方、定子が産んだ敦康親王は、道長の権力の前に天皇になれず、定子自身も二十三歳という若さで亡くなったため、伊周は急速に力を失った。定子の死後、なお十年を生きた伊周であったが、失意のうちに三十七歳で亡くなった。その間、抱き続けた悔しさは並大抵ではなかったらしく、足の裏に道長の名を書き、毎日踏みつけて歩いたと言われる。その一方、権力闘争に勝利した道長は、伊周の死後、内覧から摂政、次いで太政大臣に昇進した。

道長が権力闘争に使った社交場は大いなる副産物をもたらした。わが国最古にして永久不滅の長編小説『源氏物語』を完成させたからである。もしも道長という存在がなかったなら『源氏物語』もこの世に存在しなかっただろう。紫式部を発掘したことが功績の第一、さらには物語を綴る上で必要な墨と紙は当時大変に貴重で高価なものであったが、道長はこれを惜しげもなく式部に提供したことが功績の第二である。

思うように平安貴族を動かし、栄華をほしいままにした道長にも最期の時が訪れようとしていた。もともと平安貴族は栄養の偏り、大酒、運動不足、睡眠不足など不健康な生活を送っていたために病気に罹りやすかった。しかも当時は新鮮な食材に恵まれていないうえに、タンパク質の摂取が少ない。アルコール度数についても濃度が足りないから酔うためには大量の酒を呑まなければならなかった。それを度々饗宴の席で呑み続けたのである。極端な運動不足にもなった。移動には牛車や馬にばかり乗って歩かない。そして深夜まで続く政務や儀式に参列して慢性の睡眠不足にもなった。

とくに道長について言えば、体が生まれつき丈夫でなかったし、持病ともいうべき糖尿病、白内障、胸の病にも悩

まされていた。政権の座に就いてからは、一層精神的な負担と仕事量の増加により頻繁に大病を患うようになっていた。なかでも三条天皇との確執は精神と肉体を極端に消耗させることになった。天皇を陰で操りたい道長とそうはさせたくない天皇は水と油であり、二人は事あるごとに対立した。強権をほしいままに道長は天皇に退位をせまるようになり、それは二人だけでなく宮廷に過度の緊張をもたらした。

加えて晩年には、子女の死を目の当たりにすることが多くなった。自身の死の二年前には、皇太子の妃で末娘の四女嬉子（きし）が、皇子（のちの後冷泉天皇）を出産した直後、十九歳の若さで死んだ。死の年の万寿四年（一〇二七）には、明子（めいし）との間に生まれた息子で出家して叡山の無動寺にあった顕信（けんしん）が、そしてその四ケ月後には皇太后の妍子がともに三十四歳の若さで死んだ。

不遇だった顕信、そして三条天皇の中宮になったために不幸だけを背負い込んだ二女妍子。結局、三条天皇は別の中宮に産ませた皇子を皇太子に据えることを道長に取り付けて退位した。子女たちの中で最も不憫に思っていた、そんな二人の死に接したとき、道長の胸中はどんな思いであったか。とくに妍子については、自分の権勢を確かなものにするために利用するだけ利用した存在であったし、耐えることだけを強いた生涯だったことが不憫だった。

道長は数多くの権力闘争に勝利したが、その間に陥れた多くの人たちから買った恨みは深かった。その恨みが病気の原因と考えた彼は、私邸土御門殿の隣に壮大な法成寺を建立し先祖とともに陥れた人たちの魂をも供養した。が、その霊験はなかった。目が見えなくなり、激しい下痢と背中にできた腫物を針で刺す激しい痛みに絶叫する日々が続いた。

そして、権力者道長もただの人と同様、ついに病には勝てなかった。十二月四日の早朝、妻の倫子、太皇太后の彰子、中宮威子、嫡男の関白頼道をはじめ天台座主や藤原実資をはじめとする公卿ら多くの僧俗の見守る中、六十一歳の華やかだった生涯を閉じたのである。

（了）

不条理な景色

― その一、かわいそうなお父さん ―

中川　とら

日暮里から水戸へ向かう常磐線の車両。

平日には珍しく、平凡な中年男と一〇歳ほどの少女がボックス席に向かい合って座っていた。

二人は父娘だった。

車窓を走る緑の景色は、初夏のそれらしく風を含んで膨らみながら波をつくってうねっている。

父親は、時折目を細くして遠くを見、娘はだまって父親の横顔を見ている。

一週間ほど前、すぐ上の兄から一通のハガキが届いた。内容は、三ケ月前に年老いた母親が亡くなったというものだった。

「知らせが遅くなってしまい申し訳ない。」

末尾に小さくかかれた文字を見つめながら、男は、今さらながら自分の身の上の事情を思い知らされるのだった。

明治が終わろうとしていた頃、その地域では豪農と言われていた本家の三男に、生まれた。

五人の息子達の中、唯一身体が弱く、農具を持つことも

なく青年になった為、父親は彼をふがいなく思い、母親は何につけ子の健康を気づかったという。
勉強だけが、生きるよりどころではあったが、兄弟達が田や畑で汗を流しているのを見るにつけ、純粋だった青年は、この家に自分の居場所はないと次第に思い込むようになった。
「東京に出たい。そこで自分の道を拓きたい！」
思いはやがて固い決意となっていく。
だが頑固一徹な父親はがんとして首をたてに振らなかった。やがて心が変わらない息子に観念した母親が、幾夜もかけて父親を説得。
「成功するまで、この家の敷居はまたがせない。」
そう言うと、幾ばくの資金を息子に渡し、勘当となったのだ。
誰も見送りに来ない、静かな旅たちだった。
東京で成功を夢見、悪戦苦闘を繰り返したが、これといった成果を上げられず歳月だけが過ぎていった。
父親に内緒で、何度か母親に急場をしのぐ借金をしたこともあった。
自らの才覚を思い知った頃、彼は知人の紹介でひと回り年下の娘と家庭をもった。
両親を早くに亡くした四人姉妹の三女で、知人がよく行く高級酒場で働く、黒髪の美しい端正な顔立ちをした娘だった。彼女はあまり気が向かなかったが、姉達が彼の出自がいいらしいと気に入り、話がまとまったのだ。
子をさずかり、ささやかな幸せの営みが始まる。
故郷は遠くなっていった。
しかし、戦中、戦後どんな時も自らの家族を想い、男は誠実に働き懸命に生きた。
やがて父親が亡くなり、何年かして母親も死んだ。
男には、両親の死が知らされない。
そこに届いた次兄からのハガキだったのだ。
母の供養だけはしたい！
「行こう！」
即決だった。

「私は行きませんよ」
妻は、自分が喜ばれぬ存在であることをよく知っていて、娘を連れていってはと、提案した。
娘は、死んだ母親によく似ていた。

ハガキをくれた次兄の分家は、時代を感じさせる大きな屋敷だった。
農地につながる庭先で、家族が総出で迎えてくれた。
「先に兄貴のところに挨拶してこよう」
日焼けした丸い顔は農業を生業とする人のそれだったが、人懐っこい目はニコニコしている。
うながされて、父と娘はそのまま長男の住む本家へ向かった。

大きな座卓の上座に、長男は厳めしく座って弟を迎えた。
男は深々と頭を下げ、「お母さんの供養をさせてください。」と言った。
「まあー、よく来てくださった。納骨は済ませたので、お位牌だけになってしまったけど」と妻がかいがいしく父娘を隣の部屋に案内する。
仏前に焼香すると、改めて死者への思いがこみ上げてくる。二人は、しばらく合掌し沈黙していた。
日が暮れ始めると、親戚がつぎつぎに現れ、にぎやかになった。
ひとしきり、話題の中心は、いっしょに来た娘で、皆、口々に「よく似てる。おばあさん、そっくりだよ！」と笑った。
男は、初めて顔をほころばせた。

我が家に戻ってから、男の帰省は、娘の心に微妙な影を落とし始める。
――お父さんは、幸せなんだろうか……。
田舎の人達のくったくのない笑顔、平凡だけどのびやかな会話、はなやかなものは何も見あたらないのに、土と野菜の匂いに包まれていると、ずっとここに居たような気持ちにすらなる。
お父さんも自分の故郷に居る時はうれしそうだ。
父親が真面目で心優しい人であることを娘はよくわか

っていた。年の離れた二人の兄達にも寛大であったし、母親にはいやみを言って追いつめることは全くなかった。いつも自分は後まわしで、家族を第一に考えてくれる。

――でも、お母さんは違う……。

心の深いところに満足してないものを持っているように娘は感じていた。

母親は、時間をつくってはよく、姉妹のところへ訪ねていった。親を早くに亡くした姉妹は何につけ寄り添って仲がいい。姉妹もみやげを持って遊びにもやってきた。

会えば、話題はつきず実に楽しそうである。しかし、家の者だけになると、母親はめったに笑わない人になった。

ある日、夕方から雨が本降りになった。

傘を持たずに仕事に行った父を、娘は心配した。ずぶぬれになって帰ってきた父親に母親はタオル一本持ってかけ寄るでもなく、遠くから「あら、傘持っていかなかったんですか。」と言うだけで、一時が万事である。

自分勝手で、思いやりが足りない母親。

「いつか、こらしめてやりたい。」と娘は思うようになった。

そして、その日は意外に早く来た。

母親は、買物に出かけると、呉服屋の前を素通りできないほどの大の着物好きだった。

若い頃から気に入ったものを何枚か、後生大事にしていた。親しい人が来るとそれを出しては生地の質、柄、染め具合と流ちょうに語る。

その中に、地味な朱の鹿の子帯揚げがあった。正絹なので手にすると、やわらかく上質な風合いが伝わってくる母自慢の一品だ。娘はその帯揚げがある引出しを知っていた。

「あれにしょう」

決断に迷いはなかった。

その日は、母が仕事に出る日で、帰宅は夕刻過ぎになる。家には誰もいない。学校から帰るとランドセルをおろし、タンスの前に立った。

引出しを引くと、プーンとナフタリンのにおいが広がる。

何も考えなかった。右手をスッと中に入れると目的のものはあった。
二本の指でそれをスーッと取り出し、引出しいっぱいにひろげた。
ふわふわした絹は、思っていたより色が美しい。
少女は息を止め帯揚げの端をつまみ、両指に力を入れた。切りさける絹のはかなげな音がする。
もう一回、もう一回。無心にそれを繰り返した。にくしみと申し訳なさが入り混じった初めての感情がこみ上げてきたが、後悔はなかった。
元の場所へひきちぎられたそれを納め、静かに引き出しを閉めると、清々しい達成感すら感じた。

母親がそれに気がついたのは、二ヶ月も過ぎてからだった。
本人の驚きは、言葉にならないほどだったが、父も兄達も誰一人、少女を問い詰めようとはしなかった。
ふすまの向こうで、父が母を諭す冷静な声だけがしばらく聞こえた。

少女の心の底に溜まってきた澱のようなものは、やがて、成長とともに自然と浄化されていったようだ。

〈その一、おわり〉

【あとがき】

生きることは、多くの矛盾との闘いだ。人生は不条理を運ぶ川なのかもしれない。抑えることのできない流れの中で、おぼれず大海にたどりつくにはどうしたらいいか。
時々、わたし達は考えさせられる。

千葉ニュータウンでの時間感覚 ―その３―

安達 真魚

新緑の手賀沼

坂道

千葉ニュータウンの区域内は坂道が少ない。ニュータウンは北総台地上にあり、山らしい山はなく、全体に起伏が少ないためだ。南房総や三浦半島の山々などとは本質的に異なる地形だ。

最近健康のためにたまに自転車に乗ることにしている。ニュータウン内は平坦なところが多いのだが、それでもちょっとした坂道はある。下り坂はらくちんであるが、登り坂は大変だ。昨年購入したクロスバイクはギア変速が２４段もあるが、最も低速にしてても、やはりきつい。加齢とコロナ渦でのマスクを付けた自転車乗車では、あきらめるしかない。いつも他のチャリに追い抜かれることが多く、自分より遅い自転車はほとんど見かけることはない。

この台地は、標高２０～３０ｍくらいだ。台地がある一方で低地がある。低地は、手賀沼、利根川、印旛沼一帯である。台地から低地に向かって、谷川が刻み込まれ、谷津田が形成される。このあたりの地形の基本的な構

成だ。ただ、ニュータウンの区域内の谷川であっても、遊水地利用として自然環境をいくらかでも維持しながら残されている個所もある。

この台地から谷津田、低地との連絡路が、坂道の主要な発生場所になる。ニュータウンのある台地から離れて他の場所へ出かけようとするときは、必ずどこかで一度は坂道を下りる必要がある。例えば、木下方面に行くならば、木下街道を松山下公園あたりまでか、千葉竜ケ崎線の亀成川あたりまで下るかもしれない。逆に、八千代、千葉方面に行くとすれば、船橋印西線を神崎川までか、千葉竜ケ崎線の新川あたりまで下るだろう。また、柏方面へは、意外と長距離になるが、鮮魚街道（なまみち）、白井工業団地を経て、金山の落とし（川の名前）で下ることになるかもしれない。いずれにしても、北総線のように高架で川を渡っているような路線などを除いて、一度は低地まで下ることになる。

東京２３区にも多くの坂道があるのは有名だ。例えば、道玄坂、宮益坂、乃木坂、けやき坂、桜坂、紀伊国坂、富士見坂などあげたらきりがない。余談だが赤坂という坂道はないらしい。東京の坂道であるが、地形的に、坂道が発生する要因は千葉ニュータウンの場合と大いに類似している。荒川と多摩川に挟まれた一帯が武蔵野台地で、台地が「山の手」、その東側の低地が「下町」だ。武蔵野台地には、東西にいくつかの川が流れている。石神井川、神田川、渋谷川、目黒川などだ。これらの川の周辺も低地になっている。中世以前は、これらの低地も谷津田だったのかもしれない。地形の様子は国土地理院のデジタル標高地形図（東京都区部）を見るとよくわかる。江戸開府以来、台地には武家、低地には町民と、住み分けができていた。江戸城は、この台地の東端から、広大な低地を一望できる場所に築かれている。太田道灌の時代には、もっと奥まで入り込んだ江戸湾を眺望できたし、海の中に浮かぶように建つ朱色に輝く浅草寺も見えていたはずだ。全国的にみても眺望のよい城は多くあると思うが、ここもウオーターフロントのオーシャンビューキャッスルだ。

東京の坂道に名前の付いたものが多いのは、千葉ニュータウン周辺の坂道とは大きく異なるところだ。歴

史的な違いとしかいいようがない。東京は、江戸開府以来日本の首都であり続け、開発当時から人口が多かったはずである。坂道周辺の土地は斜面のため、当初開発は遅れただろうが、人口増加とともに坂道も高度に土地活用されて周辺に人が住むようになれば、坂道にも名前が付いたのも容易に想像できる。一方、千葉ニュータウン周辺の坂道では、名前の付いた坂道などあまり聞いたことがない。主な坂道はニュータウンの区域外になるので、その周辺に人が増えることはないだろうから、名前など必要ないのかもしれない。ただ、気が向いたら自分なりに勝手に名前を付けて自己満足してみようかなと思ったりする。

街の成熟度

随分と昔の話であるが、『ニュータウンのように新しくできた街には、「一杯飲み屋」というのがないんだよ』という人がいた。今でも宵になると、決まった飲食店とかスナックとかにいって一杯ひっかけないと1日が終わらない人も多くいるだろう。しかし、世の中は大きく変わっている。そんな昔ながらの店は少なくなってきている。少なくとも、千葉ニュータウンのように開発年代が新しいニュータウンのようなところはとくにそうだ。

どんな街でも、開発された年代、目的、環境、地形、その他いろいろな事情によって街のでき具合、スタイルなど違うのはあたりまえである。江戸時代でも明治時代でもおなじことだ。近年の住宅開発であれば、「一杯飲み屋」のようなものは、立地しにくいように思う。それでも個人経営でそのような類の店は期待されるだろうし、中高層住宅の一階のテナントで出店している例などもたまに見かける。

千葉ニュータウンでは、印西市大塚に一部ビジネス街が立地している。これは東京のベッドタウンとしての住宅だけでは、鉄道通勤の一方向だけが空っぽになるので、単純にニュータウンに通う逆方向の通勤客を増やすために計画されたようだ。アルカサールには、何

店かの飲み屋さんがあるが、これらの店は、やはりビジネス街の帰り客を狙ったものというか彼らの便宜を図って企画されたものだと聞いた。これはこれでいいのであろうが、やはり、昔風の「一杯飲み屋」とは、ちょっと趣が違うような気がする。

２０、３０年前にこのニュータウンに転居してきたときは、店らしい店がほとんどなかったが、時間経過とともに千葉ニュータウンの店舗が飛躍的に増えたのは周知のとおりだ。生活する上では、多くの点で不便であった。しかし、時間はかかるが、街は成熟していくものである。住みよさランキング１位になってしまった。

千葉ニュータウンの周囲には船橋市、柏市、我孫子市、八千代市など長い歴史を持つ街が多くある。印西市でも木下地区はニュータウンとは桁はずれの歴史を持つ。やはり街の発展の原動力となるのは、そのときの時代要請や背景によって、いかに交通が整備されていたかによる。木下地区の発展は、江戸時代頃からの木下街道と利根川の水運の結節点であったことが大きい。他にもこの周辺での交通整備の重要さの例をあげてみる。柏市は現在４０万都市であるが、江戸時代は水戸街道の小さな村に過ぎなかった。常磐線の柏駅を誘致し、国道１６号線が通過することなどによって今日の発展をとげた。結果として鉄道と道路の整備状態が発展の大きい要因になった。もう一つの例として、津田沼と松戸を結ぶ新京成線であるが、この路線は旧陸軍の演習用の鉄道だったため、くねくねとして蛇行する線路として有名である。東京にも比較的近いし、沿線の住宅開発は早かったであろう。ネット上の地図を見ても鉄道に沿って人家は多い。しかし、沿線から東京と反対側に離れると極端に住宅地はまばらになる。鉄道路線整備が大きく影響している。この沿線には、中大規模の開発もあるが、小規模開発も少なくないようで、全体的にはニュータウンのように整然としていない感じがある。これは、主により都心に近いという地域性と開発年代の違いといってよさそうだ。

いずれにしても、これらの沿線の街は成熟度が高い。開発が古く、それなりに街としての歴史があるからだ。

少し従来型の暮らしを好む人にはいいのではないかと思う。ただ、ニュータウンに長く住んでいると、社会インフラや防災の面などでも整備が進み、区画整理の整ったニュータウンのようなところの方が、やはり安全でいいと思ってみたりはする。

印西市の南西には八千代市が隣接している。面積では印西市の４０％程度だが、人口はその倍近くあるやはり首都圏のベッドタウンだ。昭和３２年に完成した八千代台団地は、日本の大規模住宅団地の発祥の地で、他にも大規模住宅団地がいくつかある。住宅団地開発とともに人口が急増した都市だ。東京には少し近いし、交通が便利なのが人口急増の理由であろう。東葉鉄道も開通している。一方で、印旛沼から花見川へ流れている「新川」沿いには広大な自然環境が残されている。住宅団地といい、自然環境といい、印西市と共通するものは多くある。東葉鉄道についても、北総鉄道と同様で、高運賃問題は共通課題だ。ただ、国道２９６号線のような極端な渋滞問題はいまのところは印西市にないように思う。八千代市は近辺の町村が合併しながら八千代町を経て現在に至っているが、「八千代」という名前は公募によって付けられたそうだ。なかなかいいネーミングだ。いずれにしても隣接する市として何かと興味深い都市だ。

八千代市内には、開発が早かったせいか、個性的な店が多くある。国道１６号線の千葉から柏に向かって米本神社から少し先に「ワイキキ」というレストランがある。ハワイ料理というのかわからないが、それぞれの料理が美味しい店で、家族の誕生会などでよく利用させてもらっている。店のなかにステージがあって、何かのときにフラダンスのショーがあったりするのかもしれない。誰か誕生日の者がいると、大きな皿にスウィーツの無料サービスがあり、派手な音楽をバックに運ばれてくるのであるが、少し恥ずかしいものがある。同じく国道１６号線のもっと千葉寄りだが、「ロサンゼルス」というイタリアンレストランがある。いつも列ができる人気店だ。また、勝田台駅の近くには、「貝殻亭」というフランス料理店もあり、ランチであったが、リーズ

ナブルな料金で美味しいコース料理をいただけた。赤ワインの旨さが印象に残った店だ。さらに、佐倉市になってしまうが、ユーカリが丘駅近くには、ジャズレストラン「ヴァンガード」があり、ジャズライブを聴きながら食事ができる。国際色豊かな街である。料理店を例にとっても、八千代市とか京成線沿線の街は、千葉ニュータウンとは比較にならないくらい街の成熟度が高いといえるのではないだろうか。

この周辺の街の多くは、基本的に首都圏のベットタウンとしての性格を持ち、それぞれ基本インフラを整備されながら発展を続けている。それも開発の時期、歴史、自然環境、交通インフラなどに影響されながら進化し、成熟していく。成熟と一口にいっても、当然料理店だけではなく、対象は多岐にわたる。それがショッピング環境の充実であったり、公園、学校、図書館、各種ホールなどの整備であったり、芸術など文化的なものであったりする。さらに経済的なものもあるかもしれない。それらは街によって個性のある成熟になるはずだ。

千葉ニュータウンは新しいがゆえに成熟が遅れているかもしれないが、それだけにこれからだと考えたほうが良い。最近、このニュータウンの周辺にはいわゆる「カフェ」と呼ばれる店が増えていることに気づかないだろうか。ドトールやスターバックスとは違い、ニュータウンの区域外の個人経営の店だ。ニュータウンの区域外は、昔からの村落があったところで、主に農業を主体に生活している地域である。里山もあるし、谷津田もあり、現在も自然環境の中にある。こういった土地は都市計画上、住宅地を開発して売却するようなことは簡単には許されないだろうから、はやりの「カフェ」を開業して、ニュータウンの住民にいこいの場所を提供しようとする発想もでてくるだろう。「カフェ」に限らず、サバイバル・ゲームとかラジコンのサーキットとかアイデア一つでいろいろな土地活用の形態が生まれてきている。個人的には、アマチュア向けのドローン練習場みたいなものがあればいいなと思う。ドローンは、操作や撮影することが遊びとして面白そうなのだが、操作習得が難しく、機材や練習費用も高く、法規制上で飛ばす場所を探すのも難しいなど多くの困難があり、趣

味としてはなかなか普及しにくい。したがって、近くの自然いっぱいの里山に法規制にかからない低料金の練習場みたいなものがあればいいなという願望だけだ。なお、比較的近くの八千代市の島田台には、「ドローン・ビレッジ」という関連の施設があり、低料金でも練習できるようであるが、プロ向けな感じで敷居が高そうだ。

ニュータウンの周辺にこのような「カフェ」とかいろいろな遊びの施設ができてくるのも街の成熟度のひとつの現われであろう。

陸の孤島

数年前、千葉市稲毛区に住む知人に千葉ニュータウンまで来訪してもらったことがあり、そのとき、『千葉ニュータウンは陸の孤島だよね』と言われたことがある。そのときは確かにそうだなと思い、うなずいていた。しかし、後で考えると彼は普段は車移動だし、千葉市稲毛区から千葉ニュータウンに来るのに陸の孤島でもないのではないかと思った。ただ、自分でも「陸の孤島」と思うのはなぜだろうと不可思議な気分になったのを覚えている。このとき、すでに成田スカイアクセス線は開通していたし、なんでそのような気持ちにさせるのだろうか改めて考えてみた。思い当たる節がいくつかある。いくつかというよりは沢山あった。

まず、鉄道の移動に関しては、

① 北総鉄道の運賃が高い。

② 本数が少ない。

③ 東京のベッドタウンとしてはやや遠く、通勤時間がかかる。

④ 千葉駅方面へのアクセスが悪い。北総線が東京方面に向かって連絡する鉄道は東武線、新京成線、武蔵野線、京成線があるが、どれも千葉駅方面へは遠回りだ。

⑤ 船橋、津田沼、柏方面へのアクセスも、新鎌ヶ谷駅乗り換えだけなのだが、なぜか、近いという感じがしない。船橋、津田沼、柏が中心という立場の人にと

っては乗り換えが１回でもあまり近いという感じがしないだろう。

⑥成田空港へのアクセスはよくなったが、成田の市街地へのアクセスは相変わらず悪い。

⑦スカイライナーが止まらない。

⑧我孫子、八千代、佐倉など南北方向へは、鉄道がないので当然アクセスは悪い。

車移動に関しては、それぞれ一般道路、高速道路について以下の２点の問題だ。

①千葉ニュータウン中央周辺から千葉、幕張、津田沼、船橋、市川、松戸、柏、我孫子、成田、佐倉など拠点となるような街へは、どこへ行くのもそれなりに時間がかかる。国道１６号については日常的な渋滞問題がある。

②千葉ニュータウンからは近くに高速道路のインターがなく、どこのインターに行くのも時間がかかる。

ニュータウン内の移動は国道４６４号線などが整備されているので、休日など一部の時間を除き比較的スムースだ。しかし、車で少し遠出するときは、高速道路を使うことになる。この周辺から東京方面へは、千葉北インター（気分によっては花輪インター、原木インター）、柏インターを利用する。最近では外環の千葉県区間が開通したので、外環松戸インターや市川北インターを選択することもできる。茨城県方面などに向かう場合は、牛久阿見インターが一番近い。最近では国道４６４号線（北千葉道路）が成田市押畑まで開通したので、東関道のインターに向かう選択肢もある。ただ、問題なのは、どこのインターにいくのも時間がかかり、どこのインターでも高速道路に入る前に１時間くらいかかることは覚悟しなければならない。つまりここ千葉ニュータウンは高速道路空白地帯のど真ん中なのだ。

ちなみに、さきほどの千葉市稲毛区に住む知人だが、意外と鉄道も道路もアクセスがいいのである。鉄道の移動であれば、総武線、京葉線、京成線に稲毛のつく駅があるし、車移動ではあれば、穴川インターが近くにあり、京葉道路、湾岸道路、東関道あるいは館山道方面へ

も楽にアクセスできる。交通の至便さにおいては、千葉ニュータウンとは天地の差がある。

それでは、将来に向けて「陸の孤島」解消の何か展望がないのか。結論としては、直ぐには期待が持てないということになるが、それでも少し考えてみることにする。

鉄道については、北総線の値下げと本数増加が実現すれば、少しは「陸の孤島」感が薄れるだろう。定年退職した年寄りも東京方面にもっと出かけやすくなるだろうし、就業のためにニュータウンを飛び出した子供たちももっと実家に帰りやすくなるだろう。人の流れが増えるのは目に見えている。ただ、コロナ渦の今はテレワークで働いている人も多くなり、逆に「陸の孤島」でよかったりするかもしれない。

道路の方については、北千葉道路（国道４６４号線）の外環までの開通が、「陸の孤島」解消のキーポイントになるはずだ。東側成田方面については、押畑まで上下２車線ではあるが開通しているので何とかなりそうであるが、西側外環の市川まではまだ事業化されておらず、まだまだ１０年、２０年の単位で時間がかかりそうだ。外環を走行してみればわかるが、北千葉道路からの入口となるジャンクション部分がすでに用意されているようなので、先のことながら開通の期待は募るばかりである。ここが開通するまでに自分が生きていればであるが、その時は自分が運転できなくなっていても誰かに乗せてもらって一度は走行してみたいと思う。この開通は、千葉ニュータウン周辺の街の発展という意味ではさらなる大きな糸口になるはずだ。

ついでに、国道１６号線バイパス（千葉柏道路）についても言及しておきたい。国道１６号線の渋滞解消とする道路であるが、この構想は相当以前から検討されてきているが、比較的最近に計画案が示された。利根川沿いルートと手賀沼ルートがあり、一番有力なのが利根川沿いルートであるようだ。手賀沼ルートは、手賀沼や既成市街地を通過するため、用地取得や環境対策で時間がかかり、難しいらしい。利根川沿いルートの場合、国道１６号線から利根川までは、県道６１号線（船橋印

西線、八千代市島田から北総花の丘公園沿いに印西市鹿黒南へぬける道路）を利用するのが濃厚である。この県道の開通で千葉ニュータウン住民は八千代、千葉方面へのアクセスが格段に良くなっている。現在、上下２車線の道路であるが、上下４車線を目標としているようだ。島田台から戸神方面までは土工部は追加分の土地が確保され、戸神の遊水地付近では謎の橋脚（？）があったりするのでなんとなくわかる。この道路は印西市鹿黒南で工事がストップされているが、その延長先が、印西自動車学校あたりを経て北千葉揚排機場をかすめて利根川の堤防まで続く感じだ。その堤防との接続個所あたりも土地確保のためか空白地になっているように見える。この路線だと市街地はなく民家もないので、すぐにでも実現できそうな現実的な路線選定だと思う。ここまでいけば、あとの利根川沿いは国の土地なので何とかなりそうだ。利根川沿いルートは既成路線のように思える。ただ、この路線が開通したとしても千葉ニュータウンの住民はあまり恩恵を受けないのではないかと考えてしまう。通過交通量が増え、渋滞発生などの懸念がでてきそうだ。

手賀沼ディズニーランド

印西市民憲章に、「わたくしたちの印西は、ゆうゆうと流れる利根川、水鳥飛び交う印旛沼、手賀沼に囲まれ、緑豊かな田園と新旧の街並みが織り成す調和のとれた美しいまちです・・・」とあるように、印西市は三方が水辺に囲まれている。そして、憲章のとおり、「緑豊かな田園と新旧の街並みが織り成す調和のとれた美しいまち」だと思う。その水辺のひとつの手賀沼であるが、そこにディズニーランド計画があったということが最近何かのきっかけでわかった。それも計画が持ちあがったのは比較的最近のことで、１９５９年ということだ。前回の東京オリンピック招致に合わせるのが目標だったようだ。手賀沼はその頃から流域の急速な都市化に伴う生活排水の流入によって、急激に水質汚濁が進行し、１９７４年度から２７年間にわたって湖沼水質汚濁日本一という不名誉な記録を更新し続けてきた。

そんな手賀沼にディズニーランド計画があったのだ。

我孫子市は、北に利根川、南に手賀沼に挟まれた地形のため、東西を走る道路がよく整備されている。沼の北岸を、北柏から布佐、大森へ抜けていくのが、手賀沼ふれあいラインである。他に国道３５６号線、利根川の土手道の利根川水郷ラインがある。手賀沼ふれあいラインは国道３５６号線のバイパス的な役割をもっているようだが、それぞれのラインが交通量を分散するための補完的な役割をもっているように思う。そして、この手賀沼ふれあいラインこそが、明治時代末頃に白樺派と呼ばれた多くの文人や芸術家たちに愛された「北の鎌倉」の湖岸の散策路だった。この道は古くからあったもので、いわゆる沼べりの道だった。現在はきれいに整備され、手賀沼親水広場・水の館、我孫子市の鳥の博物館もこの道路沿いにある。五本松公園付近では陸側を通っているが、これは新たに整備されたもので、沼べりの旧道はそのまま残っている。

手賀沼にディズニーランドとなる大型遊園地は、現在の手賀沼公園から我孫子高校のあたりに計画された。沼を埋め立てて用地を確保しようとしたのである。当時の後楽園遊園地の倍くらいの用地に、各種遊具、ジェットコースターなど、科学館、音楽堂、体育館、陸上競技場も計画されている。今の我孫子高校のあたりにはジェットコースターが配置される予定だったようだ。目玉は、沼に人工島をつくり、タワーを建設し、遊園地と空中ケーブルで結ぶというのもある。さらに、対岸の箕輪城址には６層の天守閣のある城を築城する構想もあったようだ。箕輪城は戦国時代の頃の城だし、小金城主の高城氏の支城だったのではないかと考えられているから、さほど立派な城であるわけがなく、６層の天守閣なんてとても考えられない。それでも築城されていればぜひ見てみたかったし、「日女若」もきっと喜ぶことだろう。

結局、この構想は頓挫するのであるが、埋め立て地は住宅地に転用され、売り出されたのだ。我孫子市若松地区である。以前よりこの付近を車で通過するとき、ちょ

っとした違和感を覚えていた。この街並みは何か変だと感じていたのだ。この道路は東西にずっと沼べりで、埋め立てられたとしても農地利用とか公園利用とかしか考えられないからだ。景観を守るべき土地だったはずである。いまではこの若松地区は、我孫子市のこの周辺では珍しく、平坦で、区画整理が整った街並みになっている。埋め立て地なので地震や水害などの自然災害の問題がなければいいと思うが、我孫子市のハザードマップには、内水による浸水実績が記録されているようである。

手賀沼は、現在も周辺住民などのいこいの場所としての役割を果たし続けている。水質汚濁の問題も少しずつ解消されつつある。沼の周囲にはサイクリングロードも整備され、とくに南岸（柏市側）にある手賀沼サイクリングロード（手賀沼自然ふれあい緑道）は幅も広くかなり快適に走行できる。これは水質浄化の事業とも関連していて、北千葉導水路の設置に伴って、このサイクリングロードもできたようだ。サイクリングロードと手賀大橋の交差部には「道の駅しょうなん」もあり利用者も多く、現在、拡張工事も行われている。なお、北千葉導水路とは、利根川（印西市と我孫子市境界付近）～手賀沼～江戸川（松戸市）を結ぶ内水排除、用水確保、水質浄化を目的とした水路であり、利根川と江戸川は、これによって水路で結ばれていることになる。

もし、この構想が実現していたならば、今頃は拡張、拡張でディズニーレイクとかディズニーリバーとかを含んだ手賀沼ディズニーリゾートになっていたかもしれない。そして、我孫子市も沼南を含む柏市も、印西市の浦部、発作あたりも、現在の浦安のように、もうすこしおしゃれでハイセンスな街になっていたかもしれない。

映画とテレビドラマの感想三編

畑中康郎

―映画「Scent of a woman」より―

①映画「Scent of a woman」について

「Scent of a woman」。

表題のScentとは、女性がつける香水の香りのことである。主人公フランク・スレードは、自らが招いた過失で盲目となったのであるが、香水の香りで、その種類、名称を明確に言い当てる達人であった。

ところで、映画のタイトルだが、主人公の名演説に感動した美人教師の香水から彼女の容姿を言い当てる場面があり、そこから採用したのだと思われる。名演説は後述する。そしてタイトルの邦訳は映画を輸入した興行者が「夢の香り」とした。

映画の舞台はベアードという高校。ハーバード大学にも推薦枠を持つ名門である。

ある時、在校生の三人がいたずらをした。樹の上に白い液体の入ったゴムの風船を吊るしたのである。彼らが反感を持つ校長の車が、いつもちょうどこの樹の下に駐車することを知っていたからだ。朝の登校時、この風船は目立つ。何事にもいたずらを嫌う校長がこれに気付き風船を落とそうとジ

ャンプして触れると、それは弾けて中の液体が飛散るという仕掛けになっていた。予想どおり、校長はジャンプして風船を破裂させてしまい、白い液体は校長の頭から全身に降り注いだ。白鼠となった。

いたずらをした三人を含む仲間四人の話では、校長は裏表のある人間である。乗っている名車も何らかの寄付金を横領して手に入れたもののようだ。その校長に恥をかかせようというのが、どうやら動機である。

ところが前夜いたずらを仕掛けているところを、チャーリー・シムスといたずら仲間の一人ジョージ・ウィリスに遠く離れた図書館入り口から目撃されてしまう。そして目撃したこの二人に図書館前で会ったのが、年配の女性教諭だった。彼女が目撃証言をしたため、この二人が校長の執拗な犯人探しに関わってしまう。最後には犯人の名を告げるのか告げないのかで、二人は窮地に立たされる。

チャーリーはベアード高の奨学生であり、これが本編のもう一人の主人公である。彼の両親はオレゴン州の田舎で小さなスーパーマーケットを営んでいる。本来なら裕福な子弟の集まるベアードの学生になるような身分ではない。このクリスマス休暇も、彼はアルバイトで生活費を稼がねばならないという苦学生だった。

このいたずら事件があった後、彼は求人カードを手にある家庭を訪問する。求人情報はフランク・スレードの姪が出した。クリスマス休暇中、姪の一家は旅行するため、その代わりにフランクの面倒を見てほしいというものだった。フランクは陸軍退役中佐で、ある事情で世を儚んでいた。物事をひねくれて考えがちな厄介な人物である。彼は盲目だった。軍事教練の際、手榴弾が爆発して失明した。言葉はきついし、意地が悪く、人の気持ちや厚意を受け入れようとしない頑固さがある。心が閉じてしまっているのだ。

訪問し面接したチャーリーは当初断ろうとするが、フランクの姪のたっての頼みでアルバイトを引き受けることになった。

フランクはある決意を固めていた。それは、あることを確認する行為だった。ニューヨークにいる実兄を訪ね、クリスマスを一緒に過ごしたいと考えたのだ。チャーリーが案内人

になった。ニューヨーク行きは姪に内緒の行動である。
飛行機はファーストクラス、超一流ホテルに宿泊、食事も超一流。贅を極めた旅行は、すでに何かを見切った行動だった。そして、翌日には何の前触れもなく、兄とその息子たち家族とのクリスマス食事会に勝手に加わろうと兄の家を訪問した。すぐわかったことは、誰も彼を歓迎していないことだった。兄はともかく最も嫌っているのがその長男である。過去にも何度か気まずいことがあったのだろう。この夜も、フランクがこの席で品のないことを話し、全員を嫌な思いにさせた。故意に嫌われることをしているとしか思えない。やはりひねくれている。ついには長男の言葉に激高したフランクが暴力沙汰を起こしてしまう。
フランクは寂しいのである。自分の方を見て欲しいのである。注目を集めようと故意にトラブルを起こすのだ。だがこんな思いを誰も気づかないし、気づこうともしなかった。
長い旅の結果は、やはりフランクが誰からも好かれていないという事実を知ったことだった。こんなことを確認するために、フランクはニューヨークにやってきたようなものだったのだ。フランクは空しさを抱え、チャーリーとともにホテルに戻った。
実を言うと、彼は自殺をするためにニューヨークに来たのである。ニューヨークを人生最後の地にしたかったのだ。そんな状況の中、図らずも旅のパートナーとされたチャーリーは、フランクが自殺しようとしていることを道中すでに気づいていた。

翌日、チャーリーはフランクの指示でたばこを買いに外出する。しかし途中で胸騒ぎを覚え、すぐさまホテルに戻った。それがよかった。そこでピストルの弾丸を装填するフランクを目撃する。ここからが大変だった。チャーリーは自らの命をかけて自殺阻止に動く。
フランクは、「自殺を阻止するなら、お前も殺す」と脅す。しかしそのチャーリー。「自分ももう終わっている。だから命は惜しくはない、殺せ」と叫び、怯むことがなかった。この終わっている、という言葉。チャーリーはすでに退学を意識していたのだ。チャーリーもまだやはり多感な少年だった。退学くらいのことで人生が終わっていたら、何のために生を受けたのかわからなくなる。しかし彼の気持ちもわからない

わけではない。重大な決意でベアード高に在学していたのだ。それはともかく、ちょっと間違えたら、フランクはチャーリーを本当に殺していたかもしれない。それほど真剣であり、事態は切迫していた。結局フランクが自殺を思いとどまったのは、チャーリーのこの言葉だった。

「あなたには、きっと愛してくれる人が必ずどこかにいる。だから生きなければならない」

そうなのだ。人は独りでは生きていけないし、その人を必要とする誰かは必ずどこかに存在している。

こうして、二人はなんとか無事にボストンへと帰ってくる。週明けの月曜日になった。ベアード高では、いままさに講堂で、懲罰委員会が全校生徒を集めて開催されようとしていた。その被告席には、チャーリーとジョージの二人が座らせられた。いたずらの犯人は別にいることが判明している。それなのに何故この二人が被告席なのか。二人とも犯人の名前を隠して言わないからだ。ここに命令に従わない二人に対する、校長の復讐に似た個人的な思いをみる。

ジョージの傍らにはその父親が座っている。ベアードに対する寄付金の多い有力父兄であった。だから校長に対しても顔が利く。一方のチャーリーには、誰の味方もいない。両親はオレゴンの田舎におり、遠距離のため、とてもベアード高まで来られない。チャーリーは独りだった。

しかし高校の敷地内で別れ、車で帰ったはずのフランクが杖をつきながら、運転手に付き添われてこのとき講堂に入ってきた。そしてチャーリーの傍らに後見人として着席したのである。チャーリーにとっては百万の味方であったろう。

ここから校長の二人に対する追及が始まる。初めにジョージに対し、三人の名を言えと迫る。執拗に追及され、ジョージはとうとう苦し紛れに自分はそのときコンタクトレンズをしていなかった。だからぼんやりとしか見えなかった、としながらも自分の仲間である三人を裏切ったかのようにその名を言ってしまう。しかしコンタクトレンズをしていなかったとはずるい言い逃れである。

校長はこの証言を必ずしも採用しなかった。視力が乏しいことを理由に犯人を確定させなかったのである。次はチャーリーの番だ。彼の方は視力がいい。だから証言すれば犯人が確定する。しかし彼は告げ口を卑怯な行為と考えているから

決してその名を言わない。校長は怒り、ジョージを褒め、チャーリーを退学処分にすると脅す。それでもチャーリーは犯人の名を言わなかった。すでに退学処分を覚悟していた。

校長は、チャーリーがニューヨークに旅立つ前にも、ハーバード大学に推薦してやるから犯人の名を言えと迫っていた。それでも彼は口を割らなかった。買収に屈しない偉大な精神が彼にあったのだ。

チャーリーはいよいよ窮地に陥った。そのとき、校長に遮られながらもそれを無視し、フランクが大声で話し出した。米陸軍退役中佐、フランク・スレードの渋くよく通る声が講堂に響き渡ったのである。(フランク役を演じたのはアル・パッチーノ)

「人はしばしば人生において、重大な岐路に立つ。そこには二つの道がある。ひとつは、誰もが通り、すでにできあがっている道。もう一つは、いままで誰も歩いたことのない道、だから草が繁茂し、見通しさえきかない。しかもこの道は急峻困難であり、たどり着けるかどうかもわからない。しかし確実に真実がある。踏破した後は、達成感、充実感が得られ、その人物をさらに大きく成長させるに違いない。さあ、どちらの道を選択する？　たいていの人間は、多くの人が通った楽な道を選ぶ。無難であり、先が見通せる。しかも誰にも非難されることはないからだ。しかるにこの青年は、困難とわかっていて自らその道を選んだ。これがリーダーの資質でなくてなんであろう。校長であるあなたは、ベアード校から大統領が二人出ている、と言った。ウィリアム・タフトだかウィリアム・テルだか知らない。しかしこんな集まりはまったくの茶番だ。真実を追求しようとしていない。この学校は密告者の巣か。このままではこの学校はだめになる。すでにチャーリー以外の全学生は堕落し切っている。この青年を助けずに誰を助けるというのか。この青年にこのまま茨の道を進ませてやろう。これがわれわれの義務であるし、この名門校ベアードのとるべき選択なのだ。チャーリーは必ずひとかどの人物になる。それは自分が保証する。もし彼を退学させるという愚を犯すなら、この学校に人物は育たない。

私は自分のいままでの人生を悔いてきた。私は人生で岐路に立ったとき、何度も安易な道を選んだ。勇気がなかったからだ。彼こそリーダーに相応しい資質を持つ。チャーリーに正しい道を歩ませてやろうではないか」

フランクの演説は功を奏した。懲罰委員会の結果はチャーリーに何のお咎めもなし、ジョージは校長の前言が取り消され、褒美はなし。一方悪戯をした三人は謹慎処分となった。その報告がなされたとき、会場は拍手と歓声に包まれた。

ついでにいうと、チャーリーを助けたフランク自身も素直な気持ちを取り戻し、人に優しくなった。これは少しも不思議なことではなく、当然起こりうることなのである。

チャーリーの生き方は、これからも必然的に茨の選択を迫られるだろう。そしてこの選択に勝ち続けることによりかなりの人物になれる。ただし、ここでいう人物とは、世俗的な成功によるものではなく、世の尊敬に値する崇高な人物のことである。

私は映画を観て感動すると同時に、アメリカのかつての上院議員エドマンド・ロスを想起した。ジョン・F・ケネディが書いた「勇気ある人々」。この中でケネディは、一期だけの無名の上院議員、カンサス州出身のエドマンド・ロスという人について触れている。

リンカーン暗殺後、第十七代大統領になった民主党アンドルー・ジョンソンは、共和党をはじめとする、南部を徹底的に弾圧せよとの世論に屈せず穏便にすませようとしていた。そんな中、陸軍長官のスタントンは大統領の考えに対抗して強硬な行動に出ようとした、急進派の人物を罷免にしたことがあった。ここで議会急進派が中心になり、ジョンソンの政治を専制的といって弾劾、有罪にすべく動いた。大統領弾劾裁判である。もしもこのとき、大統領が弾劾されれば、おそらくその後の議会運営は恣意的なものになり、民主政治は遠のき、混乱を極めたものになっていたであろう。

このとき旗幟鮮明を最後まで留保した人物がいた。ロスである。そのため運命の悪戯か、ロスの持つ一票が、図らずもキャスティングボートを握ることとなってしまった。つまり、彼の一票でジョンソン大統領の有罪無罪が決するのである。三権分立の精神が侵されてしまうことに危機意識を持ったロスではあったが、自分の利害を天秤にかけ、迷いに迷った。そしてそのときは訪れた。有罪票に投ずればすべて身の安泰であった。しかるに彼は、議員が固唾を呑む中、共和党員でありながら、民主党の大統領を擁護する無罪票を投じた。これにより、ジョンソン大統領は救われ、民主政治の潮流は維

持されたのである。
しかし、ロスは共和党から除名され、政治的生命も未来も財産や名声もそのすべてを失った。個人的名誉より、より大きな大義あるいは正義のために自己を棄てたのだ。
ケネディはそんなロスの勇気に敬意を表し、その著書に名を記録した。ロスは勇気ある人間として永久に名が残ったのである。そして周知のとおり、その後のケネディ自身のとった行動も、キューバ危機やベルリン危機等々、政治生命を賭けた勇気あるものだった。現在、人類が存続できているのも、ケネディの英断の賜物である、と私は思っている。

②映画「哀愁」

ビビアン・リーとロバート・テイラーが主演したこの映画は傑作と思う。悲恋物語であるが、同時に人生の理不尽を訴える深みのある作品となっている。一九四〇年マービン・ルロイ監督作品である。
ヒロインはクラシックバレーダンサーのマイラ・レスターである。彼女は一八九五年の生まれと設定されているから、そのとき一九だったであろう。舞台は第一次大戦が始まった、恐らく一九一四年ころと推察される。
物語の発端はロンドン・テームズ川に架かるウォータール橋の上。そこでマイラと前線基地に出向くばかりになっていた、イギリス陸軍大尉ロイ・クローニンが運命の出会いをする。空襲を避けて人々が集まる中、二人は出会ってお互い一目ぼれとなる。そこで些か性急なのだが、ロイは彼女とレストランでディナーを摂り、その後でマイラに結婚を申し込む。理由として考えられるのが、ロイが軍人であっていつ死ぬかわからない状況に置かれていたからだろう。逆にマイラの立場から見れば、すぐ未亡人になる危険性がある。戦争が終わるまで待つ選択肢もあるのだが、二人は待っていられなかった。
この映画にはいくつか運命の分岐点と思われる場面が随所に出てくる。
ひとつ目は結婚式を挙げられなかったことだ。訪れた教会では午後の時間に結婚式は扱わないルールのため牧師に断られ、翌日午前中に延期になった。ところが、その晩のうち

にクローニンに出征命令が出て、結局、結婚式を挙げられなかった。もしそのときマイラがクローニン夫人の身分になっていれば、クローニンの母親も後に行方不明となったマイラを捜さないはずはなかった。

ふたつ目の分岐点は、マイラが行方不明となる前の時点でクローニンの母親とマイラが喫茶店で会うシーンだ。クローニンがマイラと会ってくれと言ったのだ。ところがそこで運命の悪戯がある。列車のトラブルで母親の到着がひどく遅れたのだ。数時間くらいだろう。長時間待っていたため、女店員が退屈しのぎにマイラに新聞を差し出したことが悲劇の淵源となる。流し読みをした中に、あろうことか、クローニンの戦死を伝える記事が目に留まったのだ。これは耐え難い。取り乱したマイラは、遅れて喫茶店にやってきたクローニンの母親にきちんと挨拶も出来ず、悪い印象を与えてしまった。やや感情的に席を立った母親はその後マイラに会おうとしなかった。そこで、もしもマイラが新聞記事を母親の目に触れさせていたなら運命は暗転しなかったはずだ。

分岐点の三つ目は、喫茶店での待ち合わせのためにクラシックバレーの劇場公演にマイラが遅れてしまったことだ。勝手に遅れたため役に穴を開けてしまい、それが原因で演出家の女性に解雇される。マイラを弁護したため、親友のキティも一緒に解雇されてしまう。当時西欧でも女性の社会進出は遅れており、そうなると仕事は簡単には見つからない。これが運命を暗転させたのだ。マイラとキティは二人で暮らすようになるのだが、二人とも仕事がなく部屋代を払えず、食べることも難しい。そうして彼女たちは生きるために駅頭に立ち、軍人相手に体を売るようになってしまうのである。

分岐点の四つ目。何年か時の流れたある日、いつもと同じように駅頭で男たちに媚びを売っていたマイラは驚くべきことにクローニンの姿を発見する。何ということか、クローニンは生きていた。新聞は誤報だったのだ。その瞬間、マイラの心の中に撒き起った激情の嵐は簡単には言い尽くせない。希望と絶望が入り乱れて彼女を苦しめたに違いない。有頂天になって歓喜を爆発させたのはクローニンの方だ。戦争の混乱の中、クローニンはマイラの元気な姿を確認してどんなに安堵したことだろう。実は母親にマイラの消息を調べさせたのだが、杳として知れなかった。

クローニンは母親にマイラと再会したことをその場で電

話連絡し、結婚の段取りを取り始めた。マイラは良心の痛みを感じながらも突然舞い込んだ幸運を手放す気はなかった。体を売って生きてきたことを黙っていれば誰にも分からない。

クローニンの家に入って驚いた。クローニン家は代々続く名門で大邸宅の門構えだったのだ。そこで考えた。クローニン夫人になってしまえば、一生食べるには困らない。執事や女中たちに尊敬され、夫人として上流階級の仲間入りが出来る。そこで彼女は自分の良心を抑え込むことに成功したか一時は思えた。

だが、幼少時から純粋に物事を考え、嘘を嫌う性格が彼女の良心の疼きを抑え込むことはできなかった。クローニンの外出していた夜、母親の寝室ですべてを打ち明け、そのまま荷物をまとめて屋敷から出て行ってしまったのだ。その際、マイラは母親に約束させる。絶対にこのことはクローニンには言わないで、そして誰にも。母親は気の毒に思いながらも頷かざるを得なかった。

帰宅したクローニンは気が狂ったようにマイラを捜す。マイラの親友のキティにも訊く。出入りしそうな場所の全てに当たる。二人の最初の出会ったウォータールー橋にも行った。しかし発見できなかった。

何日かが過ぎ、ウォータールー橋の上で交通事故があった。若い女性が走ってきた車に突然飛び込んだのだ。即死だ。それはマイラだった。足元には彼女のお守りとしていた子供が持つような小さなアクセサリーが転がっていた。このお守りは一時マイラから持たされたことがある。だからクローニンにとっても思い出深い品だった。そして何十年と月日が流れて、彼は再びこの橋の上に立った。随分と容貌の老いた彼は、このアクセサリーを持って感慨に耽る。マイラを忘れることはなかったのだ。ここで映画は終わる。

この物語に登場する人物たちはどの人も私に言わせれば善人だ。善人ばかりであってもボタンの掛け違いで運命はここまで悲劇的になるということだ。

例えば、劇場の女性演出家も単に仕事熱心でクラシックバレーを心底愛しているだけだった。いい加減を許さないのだ。厳し過ぎてバレリーナから反感を受けても考えを変えない。それはそれでいいのだが、ここでは悪魔の所業としてマイラ

を襲った。

キティも極め付きの善人だ。マイラを弁護して一緒に解雇された後もマイラを恨むことなく精神的に大きな支えとなる。真の親友と言えるだろう。マイラがクローニンと再会して幸せをつかみそうになった時も決して嫉妬することなく、こころから祝福できる心優しさと大きさを持った女性だった。ひねったミステリーでは嫉妬にかられたキティがクローニンの母親に秘密を暴露することで運命を暗転させることもあるが、この映画ではそんなこともなかった。最近のドラマは人間の汚い面を強調しすぎるきらいがあり、深掘りが逆に物語を浅薄にすることもある。

クローニンの母親も善人。上流階級に住み、他人に寛容で優しかった。マイラとの初対面では、やや感情的になり席を立ったのもマナーのしっかりとした世界に育ったからだ。クローニンにも当然優しく、彼の気持ちがわかっていた。だからマイラを失うことで彼が絶望することを容易に予測できたはずだから、マイラを許し説得もできた。が、そうしなかった。しかし仮に許したとしてもその後はマイラと母親との間で苦しい葛藤になったことは間違いない。それなら良心を眠らせたままでマイラだけが苦しむ方がよかったとも思える。それが彼女の勇気なのかもしれない。身を落としたことはクローニンを裏切ったことには決してならないからだ。

私はクローニンが最も気の毒な立場にあると思う。母親は約束を守ってマイラの過去に触れないだろうし、キティも当然言わない。理由の分からぬままクローニンは生涯苦しむことになるのである。愛する女性が突然目の前から失踪する。人間としてとても耐えられることではない。

人生は理不尽であり、また不条理である。これはフィクションであるが、現実にないことではない。だからこそ荒唐無稽と片づけられずに名画として今も残っているのだと思う。

③中央流沙

松本清張の小説「中央流沙」のドラマ化された映像を見た。何度もそうしたドラマ化が繰り返され、それだけに社会に大きなインパクトを与えた作品だったと言えるだろう。今回の作品は原作をさらに現代に置き換えたもので、時代背景は丁

度通産省が経済産業省に再編されたころだ。ＩＴ産業を立ち上げるための土地買収に絡む汚職事件ということにした。原作では農林省の食糧管理局長の製糖産業に関わる汚職事件を扱っており、その汚職に絡む単なる窓口の役割だっただけの課長補佐に責任を負いかぶせ、局長の指示で自殺を強要するストーリーだった。今回のテレビでは舞台が通産省に変わっている。

このドラマを見て、再び怒りが私の体内で沸騰した。どうしてこうも人間はくだらないのか。キャリアの人間は行政の要たる中央官庁を自分の出世の道具としか認識していない。政界に打って出る足掛かりにするのだ。そんな輩が多すぎる。勿論、そうではない立派な人々もいるにはいるが、数は限られている。一方、ノンキャリと言われる人々については、大学を卒業はしているものの国家公務員試験の上級資格を取っていないため、どんなに努力しても本省の課長以上にはなれない。この違いがノンキャリのキャリア組に対する態度、振る舞いにおいて卑屈に傾いて行く原因となる。キャリア組はこうした人々に追い越される心配がないから傲慢不遜に接し、人間扱いをしない。ノンキャリはキャリアの命令に従順であることが当たり前なのである。彼らの視線は次第に俯き加減になり、キャリア組の間違った指示にも何ら反論も意見も言えない雰囲気が醸成される。そんな状態でいい仕事など出来るはずもない。

ドラマでは死に追いやられる倉橋課長補佐がやり手局長の汚職の片棒を担がされる。手八丁口八丁の上に妻が政界の大物の娘であることから事務次官に対しても大きな態度で接するような男だった。その局長が試練に立たされた。マスコミに目を付けられ、汚職の疑いを追及され始めたのである。検察の目も厳しくなり、この局面を越えなければ将来がなくなる。そこで考えたのは、土地買収の事務一切を仕切った課長補佐の存在だった。この男がいなくなれば、証拠隠滅が図れるのである。使ったのは、局長と以前からつながりがある顧問という名の得体の知れない男だった。この男を使って、倉橋に自殺を強要するのである。仮に事件が発覚しても顧問との関係を全否定すれば局長の自分には傷がつかない。

勿論、強要すると言っても、自殺しろなどと直接的な表現は使わない。しかし言葉の言い回しで倉橋には自殺を示唆しているとはっきりわかるのである。さすがに拒否した。する

と最終的にはその顧問の男に殺されてしまう。殺人は想定内だったのである。

現場は作並温泉である。倉橋の出張先に局長の命を受けたという顧問の男から電話が入り作並温泉に呼び出される。顧問の男はこの温泉には何度も来ており、もともと土地の形状を熟知していたし、最初の目撃者になる早起きの雑貨屋の女性の存在も頭に入っていた。

倉橋は崖下で転落死体となって発見されるのである。ドラマでは殺害方法を明らかにしていない。しかし顧問の男が火葬を急がせたことから解剖すると謎が解ける類の事件なのだろう。

この小説で清張は、日本の黒い霧の多くは、こうした権力のどうにもならない上下格差があると言っているのである。これを助長するのがキャリア組にもノンキャリア組にもそのレベルに応じて等しく存在する出世志向だ。どうして自分の最も大切な尊厳を捨ててまで出世を第一に考えるのか。

ドラマでは別に真の主役が存在する。緒形拳が演じる山田事務官である。まったく出世と無縁な下級官吏だ。もとは倉橋と同期だったが、若い頃ある上司の推奨する案件に反対したために干され、出世とは無縁の日陰の存在に落とされていた。この山田事務官が局長の命令で転落死事件の処理に奔走する。遺族との対応、葬儀一切の取り仕切り、マスコミ対応等々である。

ドラマは簡単に終わらない。山田は処理に奔走する中で、局長が限りなく黒と想像させる証拠物件に辿り着く。そこで山田の取った行動はまったく意外なものだった。証拠物件を携えて局長室に乗り込むのである。局長から受けた今回の扱いやそれ以前にもずっとキャリア組からバカにされ続けた山田のせめてもの怨念の爆発だったのであろう。一世一代の大勝負だったのである。しかし局長は鼻で笑い、何ら怯えることはなかった。証拠にはならないと嘯くのである。現実は実際にそうなった。いつの間にか検察にも政治の手が伸びてウヤムヤになったのだ。つまり、これが世間だと清張は主張するのである。山田は定年退職まで二年を残し辞職してしまう。

権力の座に居る者はいつまでも甘い蜜を吸い、弱い立場にいる者はいつまでも日陰に追いやられる。清張はこんな世間であってはいけないと警鐘を鳴らしたのだと思う。私はこのドラマを見て、またしても人間と言うのは下らない存在だな

という思いを強くした。

宗教で言えば、現世の争いや営みは泡沫の夢に過ぎないのにどうしてここまで醜い闘争を繰り返すのであろうか。人間は死に際してやっと真実に突き当たる。あの秀吉の辞世の句「露と起き露と消えるわが身かな　難波のことも夢のまた夢」がよく物語っている。人間と言うのはこうした空虚な闘争を永遠に繰り返す存在なのかもしれない。

（了）

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に二回発行する等の文芸活動を行う。
・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。
・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する者とする。
・会員は、年会費千円を負担すること。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。
・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。
・作品の長さについては特に規定しないが、一回に掲載できる枚数は、原稿用紙で一〇〇枚以内とする。
・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

伊能忠敬と四人の妻

― 第四回 ―

香取 淳

―観福寺の妙諦信女の墓―

伊能家の墓地から二～三十間も離れた柏木家の墓地に凛と建つ碑は、父幸七とその娘の潔い生き様を偲ばせる。

十一、激務のなか、二番目の妻と結ばれる

ミチの葬儀の翌朝、江戸から戻っていた養子の景明、通称 盛右衛門が客間で旅の支度を調えていた。彼は一年と少し前に鎌倉河岸にある出店 加納屋に移り住み、米穀商を営んでいる。忠敬は、「ゆくゆくは加納屋の店主に……」と鎌倉河岸に送り込んでいたが、ミチの重い病気のため、師走の初めに帰省させていたのである。

盛右衛門は、まだ駆け出しの商人ではあったが、米穀類の売掛金が気になって仕方がなかった。年内の掛売り分は大晦日までに集金する決まりであるが、店（たな）の手代に「すべてお任せ」という訳にはゆかない……。稲（いね）と弟妹たちが「せめて母の初七日までは」と引き止めるのを振り切って、鎌倉河岸に引き返そうとしていた。

旅支度が調い、玄関の上がり框（かまち）で草鞋（わらじ）を履く盛右衛門を忠敬とイネが送り出す。イネは素早く下駄を履いて、景

明のすげ笠を手に取った。そして、「表門のところまで、お見送りを……」と言う。
忠敬は、無理を押して店に戻ろうとする盛右衛門に、商人としての見込みはあるな……と眼を細めながら、励ましの声を掛けた。
「盛右衛門、売掛金は一銭も残さずに回収すること、大儀だが気張れよ。それから年が明けたら年礼(年始の挨拶回り)も手抜かりなく頼むぞ」
「はい。でも……、まだ母上の喪が明けていませんが?」
「構わぬ、鎌倉河岸まで喪に服することはない」
「はい、それでは門松を飾り、年礼もしっかり努めます」
「そうそう、年礼では築地の大先生を忘れないように」
「築地の大先生?」
「医者の桑原隆朝だよ、これからも江戸に行ったら療治を頼みたいのでな」
忠敬は天明二年に、盛右衛門を鎌倉河岸に送り込んだが、その頃は忠敬も江戸に足繁く通った。経験の乏しい養子の盛右衛門に、米穀商の心得や経営術を教え込んでいたのである。その折に、持病の痰咳(たんがい)(慢性気管支炎)が悪化して、ひどい咳に悩まされることがあった。たまたま出入りの豪商から、「築地に名医がいる」と聞き及び、彼は築地の診療所を訪ねてみた。桑原隆朝の療治はそれまでに経験したことがない格別なもので、激しい咳込みは信じられないほど楽になった。それ以来、忠敬は江戸に行くたびに隆朝の診察を受け、体の不具合を治して貰っていたのだ。
「判りました父上、それでは行って参ります」
母屋を出た盛右衛門は、植え込みに囲まれた敷石を踏んで表門に向かった。「無理はしないでね、景明さん。船旅は寒いから風邪をひかないように……」とすぐ後からイネが囁く。彼女は、佐原川に沿った門の前で菅笠を手渡し、盛右衛門の後ろ姿が見えなくなるまでその場に立ちすくんでいた。
伊能家は急死したミチの忌中であったため、年が改まっても門松や鏡餅、おせち料理などは控えていた。もちろん、年賀の挨拶回りをすることはなく、訪れる客もなかったので、身内だけでの静かで寂しい正月になった。しかし、松が明けた途端に忠敬の身辺は俄かに忙しくなってくる。
冬場に入って、何の蓄えもない百姓や村人たちはいよい

よその日の食べ物にも事欠くようになっていた。それらの家や名を連ねた書付けを手に、本宿組の組頭や百姓代が入れ替わり立ち代わりにやって来る。忠敬が名主を務める本宿組に止まらず、豪家が少ない仁井宿組や上宿組の名主や組頭たちもやって来た。そして、飢えに苦しむ家々の名を連ねて伊能家に助けを求める。忠敬はそれらの申し出に偽りや重複した先がないか、よく吟味をした上で蔵に蓄えた米を分け与えてゆく。さらに、金が要る場合、例えば病人がいる家には必要な薬を買う金などを配った。

一方、昨秋から奔走してきた堤防の補修工事はほぼ完了したものの、水害を被った土地の区分をめぐる争いが頻発していた。洪水に晒された土地や田畑は真っ黒な泥地となり、水が引いた後には何の目印も残っていない。通路や水路、田の畔（あぜ）や杭木などはすべて無くなってしまう。その泥地と化した土地に田畑を所有していた百姓や地主たちは、「この辺はうちの土地だ」と互いに主張して譲らない。それらの揉め事の間に入って調整に当たるのは名主の役目で、忠敬は次々と巻き起こる紛争の調整や解決に奔走していた。

佐原に限らず、近隣の村々では洪水で田畑や土地が流されることは珍しいことではなかった。坂東太郎とも呼ばれる利根川では、洪水の被害はほぼ毎年のことで、水が引いた後の田畑を元の所有者に戻す事業は、その土地のリーダーに課された重要な任務でもあった。忠敬は伊能家に入婿して以来、洪水に見舞われた田畑の復元、とりわけ土地の測量に強い関心を抱いてきた。彼は、水害からの復興現場に自ら出向いて、作業を指揮する長老から測量の知識や技術を直接学んできた。

さらに、伊能家の蔵には過去の洪水とその復旧に関する資料が数多く残されている。亡妻ミチの祖父に当たる景利（かげとし）が書いたもので、当時の村の絵地図から復元のための測量技術に到るまで、克明に記された書付が保管されていた。忠敬はかつて、幕府から河岸問屋として公認を得るために、過去の実績を求められたことがある。その折も急遽 佐原村に引き返し、景利の残した取引の記録を見出して窮地を救った。その時から、忠敬は祖父を深く尊敬するようにな

っていたが、土地の測量においても景利に学ぶことは多かったのである。

伊能家に入婿して以来、忠敬が身につけてきた多くの知識や技術は、水害後の名主の仕事に大いに役立った。彼は近くの高台や大きな岩、立木などを目安に消えた境界線を再現して、田畑や土地の所有者を明確にしてゆく。そして、測量した資料を示して、紛争の当事者たちが互いに納得するまで調整や調停に当たった。

村内の紛争は、洪水後の土地をめぐる百姓や地主の諍いだけではなかった。全国から商人が集まってくる佐原村では、夫々の生活習慣や価値観の違いからか揉め事が絶えない。商人同士の、あるいは商人と百姓との間で争いごとが頻発していたのである。それらの揉め事は訴訟として地頭に訴え出られるが、地頭所の侍には対応する力はまったくなかった。結局、訴えは無視されて捨て置かれるか、それでも当事者たちが引き下がらない場合には、忠敬たち村の名主が、地頭に代わって裁定を下していたのである。

忠敬は、村政や救民の活動に忙殺される中でも、家業の経営から目を離すことは許されなかった。とはいっても、一人の人間に出来ることには自ずと限界がある。いきおい番頭の久兵衛を頼ることになるが、忠敬は出掛ける前に打ち合わせを綿密に行い、戻ってくるとその日の報告を詳細に受ける。そして、次に打つ手や米穀等の売買を細かく指示、当主でなければ出来ない用件があれば、翌日や翌々日の行動予定に組み入れていった。

多忙な日課をこなし、内働きの女たちが拵(こしら)えた夕餉(ゆうげ)を食べると、忠敬は疲れ果てて泥のように眠った。そして、夜明けとともに目覚めると、身なりを整える間もなく朝餉を済ませ、すぐ仕事に取り掛かる。休息はおろか、安らぎや寛ぎもない日々の暮らしで、忠敬の身なりや立ち居振る舞いはただならぬ様相を帯びてきた。乱れた髷(まげ)と無精髭を生やした顔に生気はなく、一人で着た袷(あわせ)には皺が目立つ。村の行事や祭事には正装の裃(かみしも)で出掛けるが、着付けが以前のようにきりりとは決まらず、ミチが存命であった頃と

は別人のように見えた。
　忠敬のひどい有様に、いち早く気付いたのは番頭の久兵衛であった。彼には、当主の顔色が悪いばかりか、気力や判断力にまで影響が出てきたように思われる。このままでは健康を損ねてしまう、いや、体より先に心が折れてしまうかも知れない……。その心配が昂じたある朝、久兵衛は出掛けようとする忠敬にやんわり声を掛けた。
「旦那様はこの頃、ひどくお疲れのようにお見受けします。少し、お休みになった方がよろしいのでは……」
「何を言うか、関場殿。ワシは休んでなんかいられないよ」
　関場というのは久兵衛の通称で、佐原川の流水を田畑に分配する小高い堰（せき）の近くに居を構えていたことによるものである。伊能家の番頭 久兵衛の 諱（いみな）は柏木幸七であるが、近所や仲間内では関場と呼ばれていた。
「それはそうでしょうが……。奥方がお亡くなりになってからは、お疲れが一段とひどくなったようで」
「まあ、それは仕方がないことだ。下女たちにミチの代わりは出来んからな」
「ひとつ、後添えをお迎えになってはいかがですか？」
「後添えだって！　それは出来ん、出来ないよ。まだ幾らも経っていないのに」
「しかし、旦那様が倒れては大変なことになります。亡くなった奥方だって、旦那様が息災で家業に励まれることを望んでおられるでしょう」
「いかん、いかん。その話はもう止めてくれ」
　忠敬は、久兵衛の話を遮って下駄を履き、そそくさと表門を出て行った。

　節分が過ぎて、庭の白梅や紅梅が一輪また一輪とほころび始めた。その梅花が凍てつきそうな寒い朝、本宿組の組頭と百姓代が忠敬の屋敷にやって来た。二人は口を揃えて、
「種籾のない百姓が何軒もあります、何とかなりませんか」と訴える。長かった冬の間に、空腹に耐えられなくなった百姓が種籾にまで手を付けてしまったのだという。種籾がないことには稲は育たず、米が実ることもない。それをよく知っている忠敬は、組頭たちの訴えを即座に聞き入れた。

そして、蔵にある酒造りのための籾米を百姓たちに譲ってやると言う。
「有難うございます、百姓たちは喜ぶことでしょう。ただ、心配なのはお代が……」
「代金は要らん。秋に実った米を、貸した種籾の分だけ返してくれればいい」
「倍返しとか、三倍返しではなく?」
「ああ、いま貸し出す分だけでいい」
「助かります。秋になったら必ず返すよう皆に伝えます」
組頭と百姓代は顔をほころばせ、何度も忠敬に頭を下げる。次の日には仁井宿組の惣代がやって来て、やはり種籾の無心をした。本宿組の話を聞いて駆け付けたに違いない。種籾が無利子で……という話は、瞬く間に村中に広がり、しばらくの間、種籾を借りに来る百姓が絶えない。忠敬が、彼らの請願に分け隔てなく応えてやったため、伊能家ではその冬の酒造りの石数を縮小せざるを得ない羽目に陥った。
困難が続く村に春が訪れ、一斉に田植が始まった。洪水に見舞われた田にも稲苗が植えられ、苗の生育と共に黒かった田は緑一色に染まってゆく。やがて梅雨に入り、その梅雨が明けると待望の出穂期(しゅっすい)。初々しい穂先に無数の白花が咲き、籾が豊かに実ってゆく……と百姓たちが見守るなか、何時まで経っても梅雨が明けない。出穂期には夏の日差しが不可欠で、陽が射さなければ結実は多くを望めない。また今年も凶作か……と人々が嘆き始めた夏の終わりに、忠敬は輪番が解けて名主を辞することになった。三年前に就任して以来、洪水や噴火に凶作と苦難の連続であったが、忠敬はありとあらゆる手を打って村の飢餓や危機状態を何度も救ってきた。その間に、心強い伴侶であった最愛の妻 ミチを失くしてもいる。
心身共にくたびれた忠敬は、次の名主に重責を引き継いで、肩の荷を下ろすつもりでいた。しかし、それを地頭の津田日向守信之(のぶゆき)が許すことはなかった。というのは、信之にとって忠敬に名主役を辞められては困る事情があった。難題が山積する村政への心配もあるが、それ以上に津田家の経済的支援者として、忠敬は最も頼りになる存在である。

そのため、名主を辞すことは認めるが、新たに村方後見役を務めるようにと命じてきたのである。

村方後見役は名主より地位が高く、佐原村の名主たちを監視する権限が与えられる。忠敬は大変な役目を仰せつかったと重荷に感じる一方で、良い地位を授かったと安堵するところもあった。佐原でご両家と称される永沢家も同じ地位にあったが、もし亡妻のミチが生きていたら、さぞかし喜んだことであろうと忠敬はしみじみと思った。入婿して以来、ミチと二人で常に「永沢家に追いつき追い越せ」を合言葉のように暮らしてきたが、この役目に就いたことで、伊能家は永沢家とほぼ同格になったということになる。

忠敬が名主を辞した、と言っても実質的には何ら変わることはなく、むしろ責任が重くなった面もあった。例えば、青田刈りへの対応である。蓄えのない百姓が秋の実りを待てずに稲を刈る愚行を指すが、これは貧しさに貧しさを上塗りすることにしかならない。忠敬は後任の名主と共に、そのような百姓を見つけると即座に青田刈りを止めさせ、秋までの食い扶持を無償で与えた。

身も心も休まるときがない日々を送るうちに、ミチの一周忌が近づいてきた。男やもめの不自由な暮らしは忠敬にとって過酷で、一時は持ち直した日常生活も再び荒んできた。生気のない顔貌や身なりの乱れに止まらず、感情の起伏が以前より激しくなっている。このままでは後見役に相応しい威厳は保てないし、家業にも差し障りが出てくる。番頭の久兵衛は、「伊能家の行く末が……」と危機感を抱き始めた。しかし、幾度も再婚話を進言してみても、当主の忠敬にはまったくその気がない。

久兵衛は、忠敬が婿に来たときから仕えているので、当主の頑固な性格をよく知っていた。そこである日、矛先を変えて婉曲に切り出してみた。

「後添えが要らないことは分かりますが、旦那様の身の回りのお世話は、誰かがしなければなりませんよねえ」

「いや、その心配は要らん。イネがいるから」

「そんな、イネさんだっていずれ嫁に行く身だし……。それとも下女の中に誰かお気に入りでも？」

「馬鹿なことを言うな、あの猿松どもの中にいる訳がない」

「そうでしょう。であれば、私の娘をお側に……」

「関場殿の娘さん？」

「はい、幸（こう）と言いますが、私の名から一字を付けました」
「おコウさんですか、歳は幾つに？」
「この秋で二十（はたち）歳に」
「二十歳か、では早く嫁に出しなさい」
「いえ、嫁に行く気がないので、旦那様のお側に置いていただければ……」
「フーム」
忠敬は、急な話に腕組みをして考え込む。
「コウが嫁に行くまで、ということでも構いませんから、お頼みします」
久兵衛は、躊躇する忠敬に畳み掛けた。
「そうは言ってもなあ、娘さんの気持ちだってあるだろうし」
「はい、その辺は大丈夫かと。もし、旦那様が受け入れて下さるなら、改めて確かめてみましょう」
「ウム、娘さんが嫌でなければ……」
「そうですか、有難うございます。早速、娘に……」
「そんなに話を急がないでくれ、関場殿の顔を立てて言っているんだから」
久兵衛は、少し強引に過ぎるとも思ったが、忠敬に長女のコウを引き合わせる算段を取り付けた。
数日後、久兵衛はコウを伊能家の屋敷に連れて来た。忠敬は久兵衛の申し出を無下に断れず、「会うだけだよ」と居間に迎え入れる。ところが、久兵衛に手を引かれたコウが、敷居を跨いだ途端に空気が一変した。彼女は、色白のやさしい顔立ちで、鮮やかな牡丹をあしらった振袖姿。腰を屈めて襖をそっと閉め、忠敬の前に膝をつく　立ち居振る舞いも絵に描いたようである。
「お初にお目にかかります。コウと申します」
畳に三つ指をついて挨拶をする声も清々しい。忠敬は、瑞々しいコウを眩しげに見ながら、狼狽気味に答えた。
「ワシは伊能三郎右衛門忠敬と申す。周りからは権六と呼ばれているが」
思わず自分の諱にとどまらず、通称までも口にした。娘に目を見張る忠敬を見て、久兵衛がすかさず問い質す。
「コウは旦那様のお側でお世話がしたい、そう思っている

のだな？」
「はい、不束者ではございますが、お許しがいただければ」
「フーム、困ったな」
「何を仰います。娘もこの通り、望んでいるんですよ」
「ウム、そんなに言うのなら……」
「よろしいということですね。コウ、よかったな」
「はい、父上。嬉しゅうございます」
忠敬は、強引な久兵衛に押し切られて……と言うのは建前で、若くて美しいコウが一目で気に入って、断れなくなったのである。
久兵衛は忠敬の同意のもと、早速、内働きの男たちに指図をして母屋の模様替えに取り掛かった。忠敬の寝室に近い一室を選んで、娘の荷物を運び込む。そして、正月が明けて間もない好日に、コウを伊能家の母屋に住まわせた。天明五年の新春、忠敬が四十歳になったときのことである。
コウは、思いがけない歓びと安らぎを忠敬にもたらした。彼女は、出掛ける前の身支度から帰宅時の着替え、凝った肩腰のマッサージなど朝から晩まで健気に尽くしてくれる。忠敬は、気立てが良くて初々しい彼女を愛しく思ったが、出来るだけ距離を置くように努めた。しかし、眩しいほどのコウに何時までも触れずにはいられない。忠敬が彼女に手をつけ、男と女の関係を結ぶのは時間の問題であった。一方、コウも、親の命で忠敬の側にやって来たのであるから、何の抵抗もなく彼を受け入れた。
忠敬はこれまで、女性に対して常に下から見上げるようなイメージを抱いてきた。自分をそっと包んではくれるが、同時に気圧されて抗うことが出来ないような強い女性像である。それは若い男性全般に言えることかも知れないが、忠敬の場合は、幼時に母と死別している。脳裏に焼きつく亡母の残像は、遥か遠くの高みにあった。また、十五祝いが過ぎて間もなく入婿したときの妻は四歳も年上で、しかも一児の母。さらには豪家の跡取り娘で、年端のいかない忠敬よりはずっと高いところにいた。加えて家業の隆盛と家格を上げることに執着していて、いつも婿養子の尻を叩き続けた。悪意は決してなかったであろうが、妻は無言のうちに自分の重い使命を夫の忠敬にも押し付けていた。
ところがコウの場合は、まったく違っていた。一九歳も年が若く、しかも忠敬を殿様のように崇(あが)めてくれる。彼女

と一緒にいるときは何の気兼ねもいらない。健やかで艶やかな肢体にとどまらず、彼女の仕草や言うこと為すことすべてが初々しくて可愛い。忠敬は、仕事が終わると家路を急ぎ、コウと一緒に過ごすときが楽しくて堪らなくなった。その満ち足りた生活で安定した心身と活力を取り戻し、彼は再び家業や村政などに打ち込めるようになっていった。

コウとの幸せな日々が続くと、忠敬はもはや男やもめには戻れないと思うようになった。そこで、コウを妻に娶りたいと考え始めたが、数年前に気掛かりなことを小耳に挟んだことがある。それはコウの父 柏木幸七が伊能家の血筋を引く者では……という不確かな情報である。以前からうわさ話には聞いていたが、直接それらしき話を耳にしたのは亡くなった豊秋の七回忌のときであった。

「幼かった関場さんがもし跡取りに入っていたら、権六さんが婿に来ることはなかったかも……」

法要後の会食の席で、酔った親族の一人が大声で話している。下戸の忠敬は、そのとき厠に立つ振りをして席を外していた。しばらくして客間に戻ろうとしたとき、襖越しに聞こえてきた話であるが、忠敬が客間に入る直前にその声は途切れ、別の話に切り替わっていた。自分の名前が出ていたので気にはなったが、誰かに改めて問い質す気にもなれない。結局、忠敬は何も聞かなかったことにして会食の席を後にした。その後、同じような噂を聞くこともなく忘れていたが、娘のコウを後妻に迎えるとなれば、放ってはおけない。

忠敬は、まず久兵衛に直接訊いてみることを考えた。しかし、本人に訊くのは不躾であり、口の堅い彼が簡単に話すとも思えない。となると、誰に聞いたらよいのであろうか……。しばらく思案した忠敬は、菩提寺の和尚に訊けばよいということに辿り着いた。檀家の家系図は寺が一番よく知っている筈であり、柏木家の菩提寺は伊能家と同じ観福寺である。早速、彼は観福寺に足を運んで、年老いた住職に尋ねた。

その和尚の話によれば、幸七は伊能家七代目の当主 昌雄の子で、三男に当たるという。昌雄は十九歳で伊能権之丞の娘ハンと結納を交わし、二五歳時に嫡男景慶が生まれたが、三十三歳で妻を病気で亡くしている。妻ハンの死から五年後の享保十五年(一七三〇)に家督を八代目の景慶

に譲って隠居し、江戸に出て趣味三昧の暮らしに入った。その江戸暮らしで後妻に迎えたアサという女性の子が幸七で、元文元年(一七三六)生まれというから、忠敬より九歳年上になる。

ところが、八代目の景慶は当主に就いた六年後に二十歳の若さで病死、九代目の家督を昌雄の弟である長由、ミチの父に譲っている。しかし、伊能家の不幸は収まらず、長由も五年後に三十七歳で死去。仕方がなく昌雄はアサと協議離婚をして、単身佐原村に戻ってきた。七代目を退いてから長い年月が経っていたが、止むを得ず十代目当主が決まるまでの中継ぎを務めることになったのである。

しかし、五十歳を過ぎた昌雄は、帰村から幾らも経たない寛保三年(一七四三)に敢無く逝去。そこで、江戸にいたアサは七歳になる幸七の行く末を案じて、伊能家の親族に掛け合った。幸七の身柄を託された伊能家の親族は、膝を突き合わせて処遇を協議した。幸七が七代目昌雄の実の子であるなら、伊能家の跡継ぎの権利がある。しかし、昌雄の後妻だと名乗るアサは見ず知らずの女で、その女が生んだ子にも会ったこともなければ見たこともなかった。その男子を、いきなり伊能家の跡取りにと言われても抵抗があり、にわかには受け入れ難い。さりとてアサが嘘をついているとも思われず、幸七という子は昌雄の実子に違いはなさそうである。となれば、それなりの処遇をするのが筋というもの。そこで親族は、伊能家番頭の柏木家に男子がいなかったこともあり、幸七を柏木家の養子、伊能家の直系なので財産分与付きの養子として迎えることで折り合いをつけた。

口が硬かった観福寺の和尚も、長々と話すうちに饒舌になってきた。和尚は最初、他家のことは話せないと拒んでいたが、忠敬が「長女のコウを嫁にしたい」と打ち明けると、分厚く綴じられた文書(もんじょ)を取り出してきて、洗いざらいに話してくれたのである。忠敬は、和尚の話で伊能家の複雑に入組んだ血縁関係がやっと呑み込め、これで何の躊躇いもなくコウを妻に娶れる……と得心して寺を後にした。

やがてコウは忠敬の子を身籠り、お腹も少しずつ膨らんできた。それを娘のイネや内働きの女たちに隠してはおけないし、安産祈願をして腹帯も巻かなければならない。そ

こで忠敬は、腹をくくって久兵衛に相談を持ち掛けた。
「実は、関場殿もお気づきかと思うが、コウがワシの子を身籠りましてなぁ」
「そうですか！　それは、おめでとうございます」
「ついてはコウを妻として籍に入れようと思うんだが」
「有難い話ですが、妻というのはちょっと」
「何か、まずいことでも？」
「いえ、ありませんが、旦那様に可愛がって貰えればそれで十分です」
「実はなぁ、先日、観福寺の和尚から聞いたんだが、コウは伊能家の血筋で、亡妻ミチの再従妹（またいとこ）に当たるというではないか」
「はあ、それは確かなことですが、妻は困ります」
「何故だ？　伊能家の嫁として何の不足もないと思うが」
「世間の目が。手代の分際で、娘を伊能家に……と勘繰られます」
「馬鹿なことを！　それは考え過ぎというものだよ」
「いえ、今のままで私は満足ですし、娘も幸せだと言っています」
　しばらく押し問答が続いたが、久兵衛は頑として譲らない。久兵衛の脳裏には、七歳のときに別れた母 アサの言葉が焼き付いていた。江戸から遠く離れた下総の村に養子に出されたときのことである。
「幸七や、これからは身の丈に合った生き方をしなさい。決して高望みなどしないで、自分に与えられた役目に精一杯励むこと。そうすれば必ず幸せになれるからね」
　母 アサの言いつけを幸七は一時も忘れずに生きてきた。手代の自分が、娘を伊能家に嫁入りさせるような大それたことを考えてはいけない。世間からも娘を差し向けて、本家に入り込もうとしていると非難され悪口を言われるのは必定。そうなっては自分ばかりか、娘も毎日が生きにくくなり、かえって不幸になる。
　その固い信念があったので、久兵衛はどこまでも己の主張を曲げようとはしなかった。一方、忠敬は、コウのためにと入籍を考えたが、父の幸七が認めてくれないことには叶わない。諦めて引き下がるしかなかったが、考えようによっては都合が良い面もある。跡取り娘であったミチの死

から日が浅い今、再婚することは世間体もあって憚られる。コウに対しては、「籍に入れようとしたが、親父様が認めてはくれぬ」と言い訳が立つ。

結局、忠敬は、柏木家の父娘が望まない入籍を無理強いすることもない……という考えに辿り着き、このままの関係を続けることになった。

十二、災難続きの中、桑原隆朝と親交を深める

浅間焼けといわれる大噴火があった天明三年の夏以降は、空を覆った火山灰の影響で悪天候が続いた。そのため、佐原村や利根川流域の村々は度重なる洪水と凶作に見舞われていた。さらに東国では想像を絶する凶作で、餓死者が道端にゴロゴロ……というような噂も流れてきた。佐原河岸に入ってくる米の多くは東国で船積みされ、銚子を経由して利根川を上ってくる。もちろん、伊能家が仕入れる米も、その多くを東国の仙台藩に依存してきた。しかし、浅間焼け以降は東国からの米は完全に途絶え、利根川流域の村から佐原に回送されてくる米も殆どなくなっていた。それでも、伊能家では幾つもの蔵に備蓄していた籾米により、酒造りや飢えた百姓への施しが出来たが、翌年もその翌々年も悪天候が続き、米の出来は極めて悪かった。地元下総や上総の米どころに手配しても米俵はほとんど入って来ず、蔵の備蓄も底をつき始めた。

伊能家の家業は酒造りが中心であるが、米穀の輸送や売り買いによる収益も大きい。その伊能家にとって米がないことには仕事にならず、当主の忠敬は米を集めて確保することに心血を注いだ。佐原の店だけに止まらず、江戸の盛右衛門にも指図をして、出来るだけ多くの米を買い集めるようにと命じている。

忠敬は、東国はもとより江戸近辺の村々には米がないので、遠く相模や駿河の国へと仕入れ先を広げてゆく。しかし、江戸から少々離れても、同業者が買い漁っているために良い米は入りにくく、値も吊り上がってゆく。一方、盛右衛門は、それであれば一足飛びに畿内まで、と買い付け先を西国まで伸ばしていた。江戸府中では誰もが「米が足りない、米が欲しい」と渇望し、求めていた時勢である。一俵でも多く買いたいと考えた彼は、予定を大きく上回る

俵数を摂津、山城、河内などに分散して手配する。注文した米の半分、いや三割でも手に入れば儲けものだと。

ところが、盛右衛門の推測は大きく外れた。西国、とくに畿内では豊作が続き、米はあり余るほど出回っていた。そこに高値での買い注文が入ったので、彼が手配した米は全数が揃い、諸藩之台所ともいわれる大坂の蔵へと集まってくる。そこから米俵は菱垣廻船という帆船に積まれ、南海路、紀伊半島や鳥羽を巡る荒海を東へと向かった。伊豆半島の下田を経て江戸に到着した米は盛右衛門が経営する加納屋の倉庫に山と積まれ、入りきれない分はさらに高瀬舟で佐原河岸へと運ばれる。

忠敬は、喉から手が出るほど欲しかった米が入ってきたので大喜び。川舟から米俵がダシに揚げられ、蔵の中に運び込まれる作業を満足げに見守っていた。来る日も来る日も高瀬舟が河岸に着いて、幾つもある伊能家の蔵は米俵で満杯になった。しかし、喜んでばかりはいられない。江戸で菱垣廻船の船主に支払う米代が巨額に及ぶため、忠敬は佐原から大量の金を江戸に運んで行く。さらに貸倉庫の支払いや江戸から佐原に運ぶ船代など、当座の運転資金も工面しなければならない。その煩雑で気苦労の多い仕事の合間に、忠敬はお気に入りの医師、桑原隆朝に往診を頼んで持病の痰咳や体の不具合を診てもらった。さらに、時間があるときには築地にある隆朝の家まで足を運こび、療治を受ける合間によもやま話に花を咲かせる。

忠敬が、築地で町医者を開業する桑原家の門を叩いたのは、今から三年ほど前になる。それは盛右衛門を加納屋の店主に据えるため、彼を江戸に連れて行った折のことと記憶している。持病の痰咳がひどくなったので、佐原に戻る前に一度診てもらおうと築地に足を運んだ。そのときに受けた療治はそれまで経験したことがない独特なもので、忠敬は隆朝の卓越した医術に驚き、感動さえ覚えた。以来、持病の痰咳や肩腰の痛みなど、体に少しでも不具合があると隆朝を訪ね、時には籠を手配して往診を頼んだりもしてきた。

その診療の折々に、忠敬は「実は私も、若い時に医者を目指して修業したことがありまして……」と若い頃の話を披露。また、和算や学問が大好きで、佐原の商家に婿入り

する前には大学頭の林鳳谷の門に入って、忠敬という名を賜ったことなども話した。大学頭の林鳳谷から名を授かったとなると飛び抜けて高い学歴になり、これを聞けば誰であろうとも一目置くことになる。

一方、隆朝も、自分は伊達の四百石の藩医であるが、藩邸での仕事がない時には町医者として自由に患者を診ている……と私事を口にする。忠敬が診療の合間に隆朝から聞いたことや、府内に住む物知りから仕入れた情報によると、桑原隆朝は二代目で、名を純と言い、数年前から御番医師、さらに御近習になったという。

純の父は初代桑原隆朝で、名は如璋という。祖父は行き倒れの浪人で、旅籠に一人残された幼い如璋は近くの寺に預けられた。彼は、小坊主のときにたまたま寺に泊まった橘隆庵の目に留まり、子供の守役として拾われる。しかし、如璋は子守役より読書が大好きで、空風呂に籠って蓋を閉じ、隠れて本を読んでいたこともあったという。隆庵は、それほどまでに学問が好きならば……と子守役を解き、少年に学問の道を歩ませた。優れた資質をもつ如璋はやがて養父 隆庵の薫陶を受けて医師になる。あるとき、仙台藩から医師を差し出すようにと要請された隆庵は、如璋を推挙して隆朝の名を与えた。晴れて伊達の藩医となった如璋は二百石を与えられ、やがて番医から御近習へと昇進し、延享三年（一七四六）には四百石に加増されている。

数奇な運命をたどった如璋は、桑原やよ子という女性と結婚し、妻方の姓を名乗ることになる。やよ子は国文学に詳しく、著書の『うつほ物語考』は優れた研究書として高く評価されている。夫妻には子供が二人いて、長女は工藤平助の妻になり、弟の純が二代目の隆朝を継いだ。工藤は紀州藩に仕え、四百石の番医として江戸詰めであったが、多彩な人物で『赤蝦夷風説考』という書物も著している。このロシア帝国に関する研究書は二、三年前に書き上げられて、幕府老中の田沼意次に献上されたという。

弟の純は病弱であったが、義兄の平助は純を可愛がり、丹精を込めて療治を施した。純が流行り病に罹った時には昼夜を問わず添い寝をして治したという逸話もあるが、平助は義弟を治療する傍ら熱心に医術を教え込んだ。長じて純は、義兄に勝るとも劣らぬほどの医術を身に着け、兄弟は「工桑二名手」と言われるほど名声を振るうことになる。

しかし、純は相変わらず病弱であり、伊達の数ある屋敷内では輿(こし)に乗ることを許されていた。

忠敬は、隆朝のプロフィールや親族の話を知れば知るほど、彼に心が惹かれてゆくのを抑えられない。ある時、忠敬が、「お役人というのはひどいものですな。金の無心ばかりで、肝心なことは何ひとつしないし、出来もしない」と愚痴をこぼした。それを聞いた隆朝は「そう、その通りだ」と相槌を打つ。忠敬は勢いづいて「弱い者には強いが、強いものにはとことん弱い。困ったものですな」と嘆いた。それを聞いて、隆朝は、「この世の行く末はどうなるものだか。ワシは多くの大名家に出入りしているが、旗本たちの…」と言い掛けて口を噤んだ。忠敬は、急に話が途切れたので、訝しげに隆朝の顔を見た。

「権六殿、あなたも若い頃に、医者を志したことがありますな？」

「はい、十五、六歳の頃ですが」

「であれば、よく解かると思うが、番医とか御典医というのは口が堅くなくては務まらん。大名の脈をとり、五臓六腑や心のありようまで知り尽くした医者が、もし大名の病状や隠し事を外に漏らしたら大変なお咎めを受ける。場合によっては切腹とか斬首ということにもなりかねん」

「ハア、ごもっともなことで」

「であるから、ワシの言うことは他言無用、たとえ気心の知れた家族といえども決して他言はしない、そう誓っていただけるかな？」

「勿論でございます。先生からお聞きした話は絶対に他言は致しませぬ」

「ウム、それで安心した。では少々込み入った話をお聞かせいたそう」

忠敬に強く念を押した後で、隆朝は大名たちの悪口を並べたてる。

「江戸の府中でワシが出入りしない屋敷は殆どないが、どこの若殿を見ても、これが成人したらどんな馬鹿になるかと思うような子ばかりじゃ。ひどい話だが、あるとき大納言様はどんな人かと旗本衆に聞いてみたことがある」

「大納言様とは？」

「一橋家から公方(くぼう)様の御養子に入られた若殿のことよ」

「次の将軍になられるお方ですか？」
「ウム、先のことは分からんが……」と、隆朝は将軍家の内輪話を続けた。
大納言様は御幼少の頃は豆蟹をつぶすのがお好きで、毎日大納言様御用といってたくさん獲ってきたものをおそばにまき散らし、お相手の子と笑ってつぶしていた。それが過ぎて九つか十ぐらいになると、今度は鶏がお好きで幾らでも召し上がる。それも棒を持って庭の中を追い回し、追い詰めた末にぶち殺すのがお好き。お慰みで腰抜けになった鶏が何羽も縁の下にひこひこして屈んでいるという有様。
「そんな不仁なお方が公方様になられたら、どんな世になるものやら分かったものではないですな」と隆朝は、忠敬の顔を見て嘆く。
忠敬と隆朝は共に批判精神が旺盛で、合理主義者でもあったため、話は弾んで盛り上がった。年齢も隆朝が一つ上ということもあり、二人は会うたびに親しさを増して入魂の仲になってゆく。

悪天候と凶作に悩まされた一年が終わり、伊能家では家族揃って新しい年、天明六年の正月を迎えた。「家族揃って」とは言っても、昨年、次女の篠（しの）が大田村（現旭市）に嫁いだので、家族は忠敬とイネ、嫡男景敬の三人になっていた。お祝いの膳を三人だけで囲むのは寂しいし、コウを新しい家族として認めて貰いたいという思いもある。そこで忠敬は、お腹が大きいコウを祝膳の座敷に呼んだ。コウは躊躇いがちに座敷にやってきて、膳の前に苦心しながら座る。忠敬は祝詞のなかで、入籍は叶わなかったが、これからはコウが家族の一員になることを宣した後で屠蘇を飲む。下戸の忠敬は盃を形だけ傾け、祝の膳に箸を付けた。しかし、座は正月とは言い難い重苦しさで、四人は無言のまま箸を口に運ぶ。忠敬やコウがおせち料理を半分も食べ終えないうちに、イネが無言でスッと立ち上がった。そして、不快な表情を露わに、座敷を出て行く。
イネにとって、コウは歳が一つだけ違う近所の幼馴染であった。その年下の娘が自分の義母になることは苦痛であり、到底受け容れられるものではない。それに独りになっ

た父の世話は私が……という思いも強かったので、「父を奪われた」という意識も拭えない。さらにコウに赤子が生まれた暁には、その子を中心に家の中が回ってゆく。住み慣れたこの家が様変わりして、自分の居場所がなくなることは想像に難くなかった。

「父上、お願いがございます」

小正月が過ぎたある日の午後、村の寄合から戻った忠敬に、イネが固い表情で話し掛けた。

「江戸にいる景明さんと結婚させてください」

「馬鹿なことを！　お前たちは兄妹じゃないか。兄と妹が結婚できる道理がない」

「いえ、景明さんは養子で私とは血の繋がりはありません」

「屁理屈を言うな、景明が養子に来た時からずっとお前たちは兄妹だ」

「父上は世間体を気にしているだけでしょッ！　自分は娘より若いおコウを妾にしておきながら、私には駄目だと言うんですか」

「親に向かって何ということを！　お前には今まで良い縁談を一杯持ってきた筈だ。それをみんな拒否してきたのはどこの誰だ！　こともあろうか、兄上と結婚したいなぞとよく言えるものだ」

けんか腰のやり取りがしばらく続いた。しかし、イネが先に折れ、引き下がる形で口論は収まった。二十三歳にもなったイネは、頑固者の父親と幾ら言い争ったところで、それが無駄なことをよく知っていたのである。しかし、彼女が義兄との結婚を諦めた、という訳ではなかった。怒りの感情を鎮めたイネは時を置かずに筆を執り、江戸の景明に宛てて長い文を認め始める。改めて父にお願いをしてみたが強い拒絶に遭ったこと、その父にこれから如何に対応してゆけばよいであろうか……と相談する文面であった。

冬が去り春四月を迎えると、忠敬の知己である飯高尚寛が伊能家を訪れた。彼は、甥の景明からイネとの結婚を認めてくれるように頼まれて、忠敬の説得にやって来たのである。尚寛は十年ほど前に栗生（あお）村の名主に就任。以来、地域の指導者として頭角を現し、北町奉行所与力給地（一万石が上総、下総に点在）の割元（総代名主）役や地方代官に

就いていた。彼との交流は、三治郎(忠敬)が十歳の時に小堤(おんづみ)村の父親のもとに戻った時にまで遡る。近くの中台村にいた清三郎(尚寛)が温かく忠敬を迎え入れ、慰めたり励ましたりしてくれた。その時から途切れることのない付き合いをしてきたが、尚寛は相次ぐ兄の死で飯高家の家督を継いで地域のリーダーになっていた。

中台村での出会い以来、事あるごとに相談を持ち掛け、助言や支援を仰いできた仲である尚寛。その尚寛が膝を乗り出して、イネと景明の結婚を許してやるようにと忠告する。しかし、忠敬は頑として首を縦に振らない。一方、遠路、足を運んできた尚寛も簡単には引き下がれない。伊能家に四日も滞留して説得を試みるが、忠敬は終始「兄妹の結婚なぞあり得ない、許せん」と頑強に拒み続けた。

「権六さん、景明とイネのことを悪く言うけど、こんなことになったのも、あなたの育て方が悪かったということだよ」

尚寛は成す術もなく、最後は忠敬に嫌味を言って伊能家の屋敷を後にした。

この一件で父と娘の関係はさらに悪くなり、イネは朝餉や夕餉も忠敬と一緒にすることはなくなった。数人いる下女たちも、見えるところでは当主とコウに忠実な振りをしていたが、忠敬がいなくなると態度が激変する。

家の中を仕切るのはいつの世も女性であることが多いが、ミチが亡くなった後は長女のイネが仕切っていた。下女たちは何事も先ずイネに相談をして、彼女の指図に従って動く。そのイネが、伊能家に入り込んだコウを忌み嫌って、事あるごとにコウの悪口を並べ立てる。そして、「お前たちはこの家の中のことだけやっていればよい、妾の世話まですることはないわよ」と下女たちを遠ざけていった。

一方、コウも、伊能家に入った時からイネの企みを敏感に察知。彼女を軽視して冷たく当たる下女たちを逆に見下して相手にしなかった。そして、「こんな下卑た女たちに頼めるものですか」と、夫の世話から掃除、洗濯、縫物などを全部一人でやり抜き、身重になってからもその生活を変えようとはしなかった。

そんなある日、コウは産気づき、住み慣れた自分の部屋で男の子を出産する。忠敬は大いに喜び、その子に秀蔵と

いう名を付けた。そして、庶子(内縁の妻の子)ではなく、伊能家の次男として正式に籍を入れたのである。
忠敬には目出度くて嬉しい次男の誕生であったが、コウには厳しい子育てが待っていた。お産の後の二、三日だけは実家から母が手伝いに来てくれたが、その後からが大変であった。昼夜の見境もなく泣く赤子に授乳をするかたわら、おむつの取り替えと洗濯に掃除。それらをコウは一人でこなしたが、下女たちは見向きもしなければ手伝いもしない。たとえ手伝おうという下女がいたとしても、コウは断るつもりでいた。
伊能家では、久々に赤子の泣く声が家中に響き、忠敬も家に帰ると真っ先にコウと秀蔵のもとに駆け寄ってゆく。イネは想像していたように家の中が様変わりして、自分の居場所がなくなったことを察知した。そして、迎えの使者が早く来ないかと、行李に着物や大切なものを詰め込み、家を出る準備を進めていた。
梅雨入りから少し経った時、栗生村の尚寛から忠敬に一通の文が届いた。その文面を読んだ忠敬は、自室に籠っていたイネを居間に呼びつけた。
「イネッ、これはどういうことだ！」
「飯高尚寛様からですね。私が行く先を探して下さいと頼んだのです」
「馬鹿なッ、このワシに黙って！」
「お言葉ですけど、父上は私の言うことを聞いてくれたことがありましたか」
「ふざけるな！　良家の娘は親の言うことを聞くものだ」
「では、この家は良い家ではない、ということですね」
「親を愚弄しおって、お前は今日限り勘当だ！」
「いえ、私の方から親子の縁を切らせていただきます」
売り言葉に買い言葉、対立していた父と娘はこの諍いを境に、互いに言葉を交わすことはなくなった。翌々日の早朝に、尚寛の配下の男と馬子の二人がイネを迎えにやってきた。イネは行李を母屋から出して馬に載せ、素早く旅支度に身を固める。そして、父や弟に挨拶をすることもなく、朝霧が立ち込める街道を南に向かった。
佐原村の家並みがすぐに途切れ、街道は山林の中に入っていく。上り勾配が急になった道の左手に母が眠る観福寺の山門が見えてきた。イネは、佐原にはもう二度と戻らな

いと決めていたので、「母の墓参りを」と供たちに言い出す。しかし、佐原まで迎えに来た年配の男は首を横に振る。「この先、道は十里もあり、道草をしていては明るいうちに着けない」と。イネは仕方がなく、高台にある母の墓に向かって合掌をして、林の中の薄暗い道を上っていった。

彼女が向かったのは、栗生村の隣にある片貝村の布留川家。尚寛は三郎次(景明)の生家に事情を話して、嫁いだ姉にイネを預かって貰うように掛け合った。江戸にいる景明、通称盛右衛門の準備が調ったら結婚させることを前提に、しばらくのあいだ受け入れて欲しい……と。

後日談になるが、イネは翌年の夏に勘当された身のまま景明と結婚、江戸の石町に新居を構え、しばらくして女児二人に恵まれている。

イネが去る時、伊能家では忠敬が物陰から様子を見ていた。「ほかにもっと良い方法はなかったものか?」と何度も自問してみるが、忠敬にはどうしても許すことが出来ない結婚であった。また、母のミチや祖母に似て、人一倍気が強いイネが親の言うなりになるということも考えにくい。結局、答えはこのような結末しかなかったのか……と、忠敬は寂しげに呟き、諦めるしかなかった。

不幸な出来事は、イネの家出だけではなかった。尚寛が伊能家にやってきた春から米の相場が急落し始め、大量に買い込んだ米の値打ちが原価を割り始めた。その後も相場は下がり続け、伊能家の含み損は日増しに膨らんでゆく。周囲からは今のうちに売り払って、これ以上の損は防いだ方がよいと忠告されるが、忠敬は、あえて米を売らないことにした。彼は、もしこのまま相場が下がり続けて大損をしたら、そのときには本宅を貸家や貸地に出す。そして、裏の畑に小さな家でも建てて、コウや乳飲み子の秀蔵と共に質素に暮らしながら借金を返していけばいいと腹を括った。

イネが家を出て行った少し前に梅雨入りがあり、来る日も来る日も空は暗い雲で覆われていた。初めは弱かった雨足が日を追うにつれて激しくなり、七月に入ると豪雨続きに変わった。そうなると洪水が気掛かりで、忠敬が三年前に補修した利根川の堤防も危うくなってくる。降る雨も半端ではなかったが、浅間焼けの火山灰や噴石が堆積して、

川底は以前より浅くなっている。村人たちが堤防の低い所に土嚢を積んで決壊を食い止めようとするが、自然の力の前にはまったく無力で歯が立たない。蓑を着た百姓たちが見守る中、堤防から溢れ出た濁流は低地の家や田畑を呑み込み、収穫が間近な稲も泥流の下に埋れてしまった。

これまでになかったほどの大規模な洪水と長雨による日照不足、病虫害が重なって、佐原村の農業は致命的な打撃を受けた。秋になっても米や豆、芋などの農作物は殆ど収穫できず、農民たちは日々の食べ物にもこと欠く有様。そのうえ、毎年凶作が続いていたので大半の家は金品の貯えもない。佐原の村全体が飢餓に陥り、放っておけば餓死者が出てくるのは明白であった。

忠敬は、伊能家の当主として困窮する村人を救わなくてはならない。その際に役立つのは何といっても米、幾つもの蔵に入りきれないほど積まれた米がものをいう。いま振り返ってみると、米の相場が暴落し続けても我慢して売らなかったことが、ここにきて大いに役立つことになった。

彼は、村の重鎮や名主たちと相談して貧しい家の救済に取り掛かった。まず、各町内に世話人を置いて、それぞれの地区で貧困に喘ぐ者を調べて貰う。その際に、村方三役(名主、組頭、百姓代)とその下の五人組が良い働きをした。調査の結果が二、三日で出揃うと、忠敬はまず餓死寸前の貧しい家に米を配り、さらに病人がいて薬代等が要る家には銭を足してやる。土地を持たない水呑百姓が多かったが、次の段階では米が採れなかった百姓たちに米か銭の何れかを配った。

生活が行き詰った家々に幾ら米や銭を配ったところで、それは一時凌ぎにしかならない。各町内の代表たちは十日も経たないうちに伊能家にまたやって来て、追加の支援を要請する。忠敬は蔵に貯蔵した米や手持ちの銭を供与し、救済活動の手を緩めない。およそ千五百軒もある佐原村の内の千三百軒余りに、一人当たり米一升または銭百文を七～八回にもわたって支援している。その膨大な軒数と長期わたる合力の過程で近在の村からも飢人を救いたいとの申し出があると、忠敬は無下に断ることはせず、佐原の村人と同様に救済に当たった。

江戸に近い関東や東国では天明に入ってから凶作が続き、慢性的な米不足に陥っていた。盛右衛門が大量に仕入

れた西国の米も一時は米相場を引き下げはしたものの、海運で運べる数量には限りがある。その上、海が荒れて菱垣廻船が航行できない、あるいは沈没を避けるために積荷を海に廃棄するような事態も起こって、暴落していた相場は上昇に転じた。加えて、多くの商人が米の買占めや売り惜しみをする『囲い米』に走ったために、米相場は止めどもなく上がってゆく。

米相場の高騰により、貧しい人々が持つわずかな金では米が手に入りにくくなってきた。そこで忠敬は、佐原や近在の村にある搗米(つきごめ)屋に酒造用の米を安い値で売り渡し、地域に出回る飯米が高騰しないように抑え込んだ。また、資金不足に陥っていた質屋には金を融通して、通常は質草にならないような鍋釜の類でも抵当として、低利で貸金をするように要請した。さらに、全国的な大飢饉により、各地で飢えた人々が続出、餓死を待つより流民になって食料を求めたり、打ち壊しを掛けたりするような不穏な空気が広がっていた。佐原村でもその兆候が現れてきたので、忠敬は村の重鎮たちと相談して、よそから流れ込んできた浮浪者には、一人につき一日一文を与えて、村から出て行って貰うように仕向けた。

この天明六年に起こった利根川の大洪水は、佐原村に近い印旛沼の干拓工事を壊滅させることにも繋がる。工事は新田開発、治水、水運を目的に、時の老中首座 田沼意次が計画し、かつて失敗に帰した難工事に前年の十月から着手していた。岩戸(現印西市)から大和田(現八千代市)まで四里余り水路を掘って、沼の水を花見川という海に流れ出る河川に繋ぐ計画であった。工事は六～七割まで進んでおり、壮大な計画は「もう少しで完成」というところまで漕ぎつけていた。しかし、利根川から溢れ出た濁流で工事現場はことごとく破壊されて、元の木阿弥となった。

印旛沼より上流にある手賀沼の干拓も同時に進められており、こちらは利根川と沼とを隔てる堤防が既に完成していたものの、やはり洪水により堤防は崩壊、工事前の泥沼に戻ってしまった。

印旛沼の干拓工事は、その後も繰り返し試みられているが、昭和に入るまで成功を収めることはなかった。土地の開発や米の増産に力を注いできた田沼意次は、このとき既

に勢いを失いつつあったが、これらの干拓工事の失敗によって失脚が早まったと言われている。

一方、忠敬は米相場の持ち直しと高騰に伴い、倉庫に眠らせていた米を求めに応じて手放し始めた。先ず引き合いが多い江戸府中で、倉庫に山と積まれた籾米を放出、滞っていた貸倉庫代の支払いや借入金の返済に充てていった。それらの業務の大半は盛右衛門に委ねていたが、忠敬自身も江戸に出向いて、主に高額の金の出納に関わる。その仕事の合間に、忠敬は桑原隆朝の家を訪問、あるいは往診を頼んでいたが、持病の療治というのは口実に近くて、忠敬は隆朝との交流を楽しみにしていた。

「権六さん、面白い男が現れましたよ」

「ほう、どんなお人ですか？」

「伊達の御曹司で、中村村由（むらよし）という男だ。公方（くぼう）様に仕えたい一心で、一万石の大名を捨てて、江戸に出てきた」

「ほう、しかし何故、そのようなことを？」

「伊達は外様だから公方様にはお仕えすることができない、どこかに譜代大名の養子の口がないものかと窺がっていたようだね」

「それで、いい先が見つかった？」

「そう、堀田家、堀田正富の婿養子になったようだ。今は伊達の下屋敷にいて、幕府から正式な許可が下りるのを待っている」

隆朝は、口外無用に願いたいと念を押し、村由の詳しいプロフィールを忠敬に話し始めた。彼は伊達宗村の八男で、二十一歳の時に中村姓を名乗って新たに一万石の大名になった。しかし、「何とか公方様に仕えたいものだ」と幕政に関わることを渇望。側室二人と子が三人いたが正式には結婚しなかった。ところが三十二歳になった時、堀田家への婿養子の話が持ち上がる。待ちに待ったチャンスが訪れると、村由は躊躇することなく一万石を捨てて今年の三月に仙台を発った。彼は、月末に江戸に到着すると、その三日後に堀田正富の娘と婚約。幕府に認められるまでのあいだ、伊達藩の下屋敷（現南麻生）に側室や子らと共に住むことになったという。

「伊達藩には志の高い人がいますね、先生の兄上 工藤平助殿もそうですが」

「いやいや、工藤の話は止めてくれ」
「お嫌いですか？」
「いや、そんなことより村由殿は志が高いだけあって、中々の切れ者。武道に限らず、教養や文才もありそうだから、ひょっとしたら大物になるかも知れませんぞ」
隆朝は、伊達の下屋敷に突然やって来た村由について、親しみと期待を抱いている……という口ぶりで忠敬に興奮気味に話す。隆朝は、日頃から無気力で無能な役人ばかり見てきたが、一万石の大名を捨てて幕府に仕えたいという村由の志の高さに注目、村由と話しているうちに政治的な力量に止まらず、歴史や和歌などの素養を身に着けた学問好きであることも知ってゆく。
村由の方も、隆朝が藩医であることは分かったものの、最初は如何ほどに身分が高い医者なのかと目を剥いた。何しろ、殿様のように輿に乗って下屋敷の中を行き来しているのであるから。しかし、内縁の妻が体調を崩したときに診療を頼んでみると、患者の看立てと療治は実に的確であり、しかも意外に気さくな医者であることが判明。何故あなたは輿に……と問うと、「病弱で、足腰が弱いもので」と恥じ入るように答える。伊達の屋敷は、上屋敷に本屋敷、中屋敷に下屋敷、さらに品川にも下屋敷があり、これらの屋敷内を移動するのは容易ではなかったのである。村由がさらに、気掛かりな公方様とその取り巻きについて尋ねると、隆朝は実に多くの情報を持っていて、それらの情報を惜しげもなく教えてくれた。
隆朝と村由は伊達の下屋敷で頻繁に会うようになり、情報交換や闊達な議論を交わす仲になってきたという。
忠敬は、決して聞くことが出来ない公方様や武家の内々の話に目を輝かせ、時が経つのも忘れるほど夢中になった。そして別れるときには、相場をはるかに超える礼金を渡して隆朝を喜ばせた。

十三、打ちこわしと政変のさなかにコウ死す

天明七年五月に赤坂や深川で勃発した『打ちこわし』は、瞬く間に江戸中に広がり、数日のうちに米屋千軒、酒屋や油屋、質屋など八千軒余りが暴徒に襲われた。その原因は米価の高騰にあり、飯米は十分に有ったにも拘らず、買占

めと売惜しみをする商人たちの『囲い米』により、町人は思うように米が買えなくなったためであった。

幕府は天明四年に米仲買人以外の商人にも米の販売を広く認めている。流通促進により米価を引き下げようと目論んだのである。しかし、結果は裏目に出て、新規に参入した商人たちも競って米を買い漁り、囲い米に走った。これに対して幕府は囲い米の摘発を盛んに行ったが、商人たちは旗本や御家人に買い込んだ米を預かって貰う、あるいは町奉行所の役人に賄賂を贈るなどの手段で、取り締まりの目を掻い潜っていた。

他方、幕府は米価の高騰に苦しむ町人を救うために、天明元年から毎年、御救米五千俵を町奉行所に支給させていた。しかし、天明七年だけは町奉行所が御救米の支給を怠り、そのうえ、町人から出された囲い米の摘発強化の嘆願書を、五月の月番であった北町奉行所が拒否した。この情報がかわら版などで流布すると、人々の不満は頂点に達し、生活苦にあえぐ貧民層を中心に、民衆が打ちこわしを決行したのである。

この米価高騰による打ちこわしは、江戸や大坂、京都など主要都市に止まらず、全国の三十か所以上もの都市に広がっていく。

全国各地で、ほぼ同時に打ちこわしが起こった原因は、荒廃した農村を捨てて都市に集まってきた農民と富の偏在で没落した零細商人、職工たちによって都市に貧民層が形成されたことにあった。とくに天明三～四年にかけて起こった東国での飢饉は悲惨を極め、弘前藩では人口の三分の一が、南部藩や仙台藩でも五分の一前後が餓死したとも言われている。東国に限らず、浅間山の噴火や冷夏、度重なる洪水で飢餓に陥った関東や甲信の百姓たちも例外ではなく、生まれ育った村を捨てて都会へと向かう。

彼らは貸家に住み、零細な商売や日雇い労働などで得た僅かな収入で家族を養っていた。食べ物を買うのが精一杯の貧民にとって、米価の高騰や物価の上昇は死活問題になる。江戸で横行していた囲い米は各地へと広がり、全国的な米価の高騰に繋がってゆく。その結果、各都市に住む貧民層の生活はどん底に陥り、江戸では自殺者も後を絶たなくなった。

忠敬が村方後見役を務める佐原村にも、江戸で起きた打

ちこわしの情報はすぐに伝わってきた。佐原の商人たちは恐れ慄き、早速、打ちこわしを防ぐための寄り合いが開かれる。大店を構える豪商たちに名主も加わって、膝を突き合わせた協議は熱を帯びた。

「我々に打ちこわしを防ぐ力はまったくない。ここは地頭所にお頼みをして、お侍に村を守って貰いましょう」

口火を切った一人が、領主の津田氏に頼むことを提案する。

「そうですな、皆で金を出し合ってお武家さまに来て貰うのが一番でしょう」

「どれぐらいお出しすれば、来てくれますかな？」

「まあ、とりあえず一人三両として、三十人で九十両、五十人で百五十両。それが長引けば二倍か三倍、まあ大変な金額になりますな」

「しかし、打ちこわしに遭って、すべてを失うよりはマシでしょう」

場の雰囲気は、大筋、地頭に武士の派遣を頼む方向に傾いていた。

「いや、待ってくだされ！」

それまで黙って腕組みをしていた忠敬が、大声を上げた。

「これまで色々なことがあったが、お役人はまったく頼りにならなかった。皆さん、お役人が何かの役に立った……という覚えがありますか？」

「いや、そう言われると返す言葉がありませんな」

口火を切った一人は引き下がったが、他の一人が忠敬に訊く。

「でも、打ちこわしが起こったらどうします？ 私らでは防げませんぞ」

「確かに、起こったらお終いです。でも、そうならないように手を打てばよい」

「そんな方法がありますかな？」

「打ちこわしがなぜ起こったのか、皆さん、よく考えてください。元はといえば、米価の暴騰、米が買えずに飢えた人々が沢山出てきたからでしょう」

忠敬は、自分自身の考えに、江戸の盛右衛門が町飛脚で知らせてきた情報を絡めながら理路整然と意見を述べてゆく。貧しい人々に狙われたのは主に囲い米をしていた商人たちであったこと。打ちこわし勢の目的は、阿漕（あこぎ）な商人

を懲らしめることにあり、彼らは規律ある行動をとり、一品たりとも盗みはしなかった……というような情報も詳しく伝えた。

「権六さん、そうすると江戸の打ちこわしは悪徳商人への社会的制裁ということになりますか？」

「そのようですな。そうであれば解決策は米ということになりましょう」

「確かに、最近の米相場では、満足に飯が食えない人が増えていますな」

集まった者たちは次第に忠敬の意見に賛同して、口々に米を配れば防げるであろうと言い出す。

「金で雇われた武士なんぞ当てにはなりません。米を配ったら、きっとその百姓たちが村を守ってくれますよ」

「権六さんの言う通りですな、武家に支払うつもりで金は集めるが、その金は佐原や周辺の飢えた百姓たちに分け与えることにしましょう」

全員の意見が一致して、集まったメンバーは夫々が拠出できる金や米について話を進める。忠敬は、酒造りが通常の半分以下に制限されていたこともあり、余った酒造りの米を放出すると提言。永沢家や他の豪商たちは米には余裕がないものの、金であれば必要なだけ出せると言う。資金の目途が立つと、今度は米の配り方について討議を進めた。忠敬は、昨年の飢饉から村方三役の組織を使って貧民の調査と救済を進めてきたが、そのやり方を近隣も広げることを提案。これに異議を唱える者は一人もなく、すんなりと決まった。そして、米を配布する村の範囲と順番を取り決め、佐原河岸に近い百姓家から、配布することとした。

この忠敬が提案した百姓たちへの対策が功を奏し、下総一番の商業都市である佐原村では、打ちこわしやそれに類する騒動は何も起こらなかった。

話を江戸に戻すと、五月の下旬に勃発した大規模な打ちこわしにより、江戸府中は三日のあいだ、無法状態に陥った。二百人余りの町奉行が鎮圧に駆け回ったものの、逆に役人たちは民衆に叩かれたり簀巻きにされたり。仕舞には十手を奪われてしまうなど、散々な目に遭った。それを見かねた幕府は、先手組（江戸城の警備・警護、治安維持役）

を新たに十組選んで、町奉行の支援に当たらせた。
武力による鎮圧だけではなく、老中 水野忠友は二万両の資金を拠出して、町人に広く御救米を配布した。さらに、町奉行所には任せておけないと、関東郡代であった伊奈忠尊が短期間で大量の米を買い集め、江戸の府中に流通させる。関東周辺の米穀市場に精通していた忠尊の機敏な動きが功を奏し、六月に入ると江戸の米価の高騰は収まってくる。
町奉行所が失態を重ねた背景には、老中首座 田沼意次の失脚も影響している。意次の失脚により、幕府に強い指導者がいなくなったことが、打ちこわしの勃発や対応遅れの要因になっていた。話は一年近く遡るが、利根川の大洪水により印旛沼の干拓事業が壊滅状態に陥った。この責任問題で意次の立場が弱くなったうえに、八月には将軍 家治が病で息を引き取った。意次は、将軍家治の信頼が厚く、それまでは政務をすべて任されていた。しかし、家治の死により彼は後ろ盾を失い、反田沼派の策謀もあって老中を解任されていたのである。
意次失脚後も、政権の担い手は水野忠友ら田沼時代の面々が占めていた。しかし、一方では政権に対抗する新しい勢力、譜代大名たちが結束した門閥層が次第に力を強めていく。そして、両者の覇権争いは、政治とは一見無関係に見える江戸打ちこわしによって大きく動く。田沼派の面々は、打ちこわしの不手際という名目で解任され、田沼派は幕閣から姿を消した。長いあいだの政権争いに、決着がついたのである。
打ちこわしの渦中にあった六月、老中首座に譜代大名たちが望んでいた松平定信が就任した。彼はかつて、次の将軍候補と目されたこともあったが、御三家および一橋治済（はるさだ）（十一代将軍 家斉（いえなり）の実父）の推挙があって首座に就いたという。就任した時期が丁度、米価高騰が沈静化した時機と重なったため、定信は多くの民衆に温かく迎えられることになった。定信は、志を一にする譜代大名で幕閣を固め、七月にはいわゆる『寛政の改革』に乗り出す。
定信は御三卿のひとつ田安家の初代当主 宗武の七男で、八代将軍 吉宗の孫にあたる。十六歳のとき奥州白河藩の

松平定邦の養子となり、二五歳になった天明三年に十一万石の藩主になっている。彼は、藩主就任と同時に天明の大飢饉に遭遇、東国の各藩と同様に白河藩も困窮を極めた。しかし、定信は自ら率先して倹約を励行、米を上方から購入したり会津藩から譲り受けたりして、餓死者を一人も出さずに飢饉を乗り切った。さらに、備蓄推奨や人口増加、殖産興業など、藩の財政立て直しと領民の生活の安定に力を注ぎ、藩に繁栄をもたらす。定信の卓越した手腕と名声は、やがて諸大名の間に広がってゆき、老中首座の地位獲得へとつながってゆくのである。

幕閣のトップに立った定信は、吉宗が行った重農主義や倹約を推奨する政治への回帰を掲げて、改革に着手する。それまでの田沼政治では、重商主義や米作偏重の政策がとられたため、貧富の格差が拡大、村を出た流民や貧しい商工業者などの貧民層が都市部に溢れていた。一方、農村においても、百姓たちの離村により田畑を耕す人手を失い、疲弊の一途を辿っていた。その厳しい社会情勢の渦中にあって、改革を遂行するためには優秀な人材が必要不可欠になる。定信は、尊敬する祖父 吉宗が築いた治世を早急に取り戻すために、改革を共に断行できる人材の発掘を強力に押し進めていった。

打ちこわしや政変と奇しくも同じ時機に、堀田家が請願していた婚姻願いが幕府から正式に認可された。天明七年の五月のことである。その知らせを、義父になる正富から受けた中村村由は、早速、白金の上屋敷に駆け付けた。そして、婚礼の日取りや婿入りの手順を、堀田家の作法にしたがって取り決めていく。

準備に忙しい村由のところに、伊達藩医の隆朝がやってきた。彼は月に三～四回、下屋敷を訪れる度に村由に会って、情報や意見の交換をしている。

「隆朝殿、決まりましたぞ！」

「何事ですかな？　随分と嬉しそうですが」

「堀田家との養子縁組じゃ。幕府からお許しが出てな」

「それはおめでとうございます。いよいよお城に上がれますな」

「それは望むところじゃが、心残りはそなたのことよ」

「えッ、私の？」

「そう、この下屋敷を出ると、隆朝殿には会えなくなってしまう」
「心配はご無用、お呼びいただければ何時でも伺います」
「辺鄙な白金までも、来てくださるか？」
「喜んで。村由殿の御用とあらば、早籠で」
「それは有難い、よろしく頼む」
「承知いたしました。私も、村由殿のお話を楽しみにしております」
二人は一年余りの交流を通して、気脈を通じる仲になっていた。
六月に入ると、村由は堀田正富の娘と婚礼を挙げて、白金にある近江堅田藩の上屋敷に移り住んだ。そして、名を『堀田正敦（まさあつ）』と改めて、七月には将軍 家治に初御目見えを果たした。家治が病死する一ヶ月ほど前のことである。さらに九月には、村由と五歳しか年の違わない正富から家督を相続して、摂津守を名乗るようになった。
政変により家老首座に就任した松平定信、伊達藩士から譜代大名の仲間入りをした堀田正敦、ほぼ同時期に東国の白河と仙台から台頭してきた二人が出会い、刎頸（ふんけい）の交わりを結ぶようになってゆくのはもう少し先の話になる。
激動する江戸と違って、打ちこわしの危機を乗り越えた佐原村は、平穏な日々を取り戻しつつあった。忠敬は、相変わらず村政や家業に追われていたが、それらの激務も家路につくまでのこと。屋敷の門を潜ると、愛妻とよちよち歩きを始めた秀蔵に囲まれ、一日の疲れを忘れてしまうほど満ち足りた暮らしが待っていた。
心配された天候も比較的順調で、真夏の陽光を受けて水田の稲はしっかりと結実。稲穂は日を追うごとに頭を垂れて、黄金色に染まっていく。秋の訪れとともに、村では一斉に稲刈りが始まった。収穫に励む百姓たちの姿を見て、忠敬は蔵に蓄えていた米を売り捌くことにした。飢えた村人への度重なる合力や打ちこわしの防止で近隣の村々に配っても、なお、大量の米が倉庫に積まれていたのである。
米相場は打ちこわしのときほど高くはなかったが、それでも利益は十分に確保できた。佐原河岸でも若干売りは立

ったが、やはり高値で大口の取引となると江戸になる。忠敬は、佐原河岸から米俵を船に積んで江戸へと運び、帰路には売却で得た大金を目立たないように持ち帰った。

保有していた米の売却は思わぬ儲けをもたらしたが、忠敬はその合間に桑原隆朝の往診をよく頼んだ。その療治に取り掛かったとき、隆朝が話し掛けてくる。

「権六殿、打ちこわしは大変でしたな」

「いやぁ、疲れました。一時はどうなるものかと危惧しましたが、殆ど被害もなく」

「ほう、如何様にして？」

「江戸の店は盛右衛門の才覚で、米を安く放出したんですよ。佐原村では、仲間と申し合わせて近隣の村にも米を配りましてね」

「それは賢明でしたな。ところで以前に話した伊達の藩士ですがな、晴れて堀田殿の婿になりましたぞ」

「さようですか、確か中村様とかいう一万石のお方でしたね」

「そうそう。幕府から許可が出たので六月に婿入りをして、名を堀田正敦と改めている。将軍との御目通りも済ませたそうですぞ」

「念願だったお城への出入りが出来るようになったということですな」

「その通りじゃ。先日も白金の上屋敷に往診をしてきたが、最近は家老の松平定信様とよくお会いになるそうだ。本人の言であるから、疑う余地はないと思うがな」

隆朝はそう前置きをして、新顔の正敦が、松平定信が主宰する『文人の集い』に招かれたというエピソードまで話した。

定信は、白河藩主として優れた能力を発揮していたが、その一方で文筆や和歌にも秀でていた。歌人・国学者であった父の宗武の影響もあって、幼少より学問に励み、十二歳のときには己の信条を記した『自教鑑』を、その後は『国本論』など、政治に関する書物を著わしている。その定信が、家老職の合間に和歌や文芸など、風流の道を楽しむ会を開いていた。定信が所有する築地の浴恩園という所に、気心が通じそうな者を集めた会のようである。その文人の集いに招かれた新顔の正敦は、定信の眼に留まるところとなり、たちまちのうちに互いの距離を縮めてゆく。

ちなみに堀田正敦も大変な切れ者で、政治や経済に卓越した知識や考えを持っていたが、それに止まらず、歴史にも精通していて、和歌を嗜むなど文武に優れた素養を身に着けていた。

「お話を伺うと、堀田様というお方はご出世なさりそうですな」

「私は伊達の下屋敷でずっと見てきたのじゃが、稀にみる人物ですな」

「そうですか、目を離せなくなりますな」

「医者の私が言うのもおこがましいが、出来るだけ堀田殿を応援したいものじゃ」

忠敬は、持病の療治より隆朝の話に夢中になっていた。そして、別れ際に礼金を渡しながら、言葉を添えた。

「商人の私に出来ることは金ぐらいですが、もしお役に立つことがありますなら何時でも言って下され。喜んでお手伝いを致しましょう」

この時、忠敬は正敦を面白い人物だとは思ったが、自分とは縁のない、雲上人と捉えていた。ただ、隆朝が惚れ込むほどの男であれば、何かの役に立ちたい……と考えたに過ぎなかった。

佐原村に戻った忠敬は、直ちに新米の買い付けに回り、酒造りに必要な米の確保に努めた。久々に佐原村や多古藩など、地元や近隣の村から入手が可能になり、東国から船で運ばれてくる米も、かつてのように河岸を賑わせ始めていた。

忠敬は、仕入れた米を蔵に運び込みながら、数年も続いた凶作と村人たちが飢饉に苦しめられてきた過去に思いを馳せた。蔵に蓄えていた米が多くの村人たちを飢餓から救ってきたし、苦難や困難を乗り越える原資にもなってきた。しかし、あのような方法が果たして正しかったのであろうか……。これから先も凶作や天災などが起こる度に米や金を出し続けても限(きり)がないし、貧しい百姓たちの暮らし向きは少しも良くはならない。むしろ、貧しい百姓はますます困窮の度を深め、『潰れ百姓』に身を落としていく。潰れ百姓というのは、飢えを凌ぎ、生きのびるために田畑を質に入れ、そのまま返済が出来ずに生活基盤のすべてを

失った村人のことを指すが、その極貧の家が増えてゆくばかりであった。

忠敬は、今まで幾度も実施してきた救民のやり方、さらには村政の在り方について、抜本的に見直す必要があるように思い始めた。しかし、そう思ったところで簡単に解決策が見つかるものではない。忠敬は、村の有力者たちと相談を重ねて、恒久的な農村の自立厚生を促す政策、現代流にいえば基金とかファンドの設立に長い時間をかけて辿り着いた。

具体的には、『組内養育のための積金』というやり方であった。伊能家も自費を百両ほど投じて、先ず、質流れとなった田畑を一手に買い付ける。買い付けの範囲は、佐原村に限らず近隣の村々にまで広げて、村組持ちの田畑、今風に言えば公営農場として信頼できる者に管理を委ねる。それらの田畑を、潰れ百姓たちに耕作させて彼らの生計を維持させると共に、毎年受け取る小作料の中から利益の一部を積み上げていく。これを何年か繰り返していくうちに、積立金は利子も含めて大きく膨らんでくる。そこで管理人は、金を積み立ててきた百姓に夫々が小作してきた田畑を積立金で売り渡し、再び土地持ちの百姓に戻してやるという方法である。

忠敬たちは、その様なやり方で自立した百姓の戸数を増やし、人手不足や耕地放棄による農地の荒廃も打開しようと企図した。この時代には、まだ誰も手を付けたことがない先進の手法であり、農村の自立厚生を促す取り組みを進めたのである。

忠敬は、佐原村にとどまらず江戸にまで活躍の場を広げていたが、家に帰ると一人の子煩悩な父親に戻った。妻のコウも父 幸七の背を見て育ったせいか、伊能家とその当主に仕えることを天職と心得ていた。コウは夫が帰宅すると、ねぎらいの言葉を掛けながら着替えを手伝う。彼女に纏わりついていた秀蔵が、頼りない歩みで寄ってきて、「とと」と覚えたての言葉を発する。その秀蔵を高く抱き上げ、忠敬は家族というものがこんなにも温かいものであったのかと、改めて己の幸せを噛みしめていた。

幸せに浸る忠敬と違って、妻のコウにはコウにしか解からない気苦労があった。それは数名もいる下女たちとの関

係で、長女のイネが家を出て行った後も好転はしていなかった。とくに忠敬の身の回りの世話と子育ては、すべてコウ一人でこなし、下女たちの手は借りずにいた。下女たちも、コウの領分には一切関与せず、手を出したら叱られてしまう……と見て見ぬ振りをする。

コウは、互いに無視し合う関係を決して良いこととは思っていなかったが、さりとて自分から下手に出て、下女たちに歩み寄っていく気はさらさらない。複雑な心境が交錯していたが、多忙な時や体調を崩した時には、誰か一人ぐらい助けてくれる者はいないものかと弱気になった。そして、夫には言いにくいこの状況が、これからもずっと続くのであろうか……と不安に駆られた。

伊能家の次男、秀蔵が満一歳を過ぎてしばらく経つと、コウは再び身籠った。そして年が明けた天明八年に、忠敬にとって三男に当たる順次を出産する。お産のあいだは柏木の実家に戻って母親に面倒を見てもらったが、数日が経つと赤子を抱いて伊能家に戻ってきた。再び孤軍奮闘の日々が始まったが、活発に動き回る秀蔵からは一時たりとも目が離せない。その秀蔵と昼夜の別なく泣く順次を抱えながらも、コウは夫の身の回りの世話から手抜きをすることは一切なかった。

下女が数人もいる豪家の御内儀であれば、お産の後は体をゆっくりと休めて、育児や家事はすべて下女たちにお任せというのが定番であろう。当主の忠敬もまた、コウは下女たちに支えられて産後を安楽に過ごしているものと思い込んでいた。しかし、当のコウは依然として彼女らとの距離を置いて、助けを求めることはしなかった。

だが、伊能家にとって、目出度いことばかりが続いたわけではない。次女の篠（しの）が、順次が生まれたこの年に、十九歳の短い生涯を閉じた。シノは、太田村（現旭市）の佐兵衛家の当主 加瀬修助に嫁いだものの子宝に恵まれず、体も痩せ細ってきた。やがて嫁らしい働きも出来なくなり、ゆっくり静養することもままならないので実家に戻ってきたのである。忠敬が、医者を呼び、滅多に手に入らない薬を飲ませても、彼女の容体は一向に好転せず、仕舞には咳とともに喀血をするようになった。シノの体は、不治の

病であった労咳(肺結核)にむしばまれていたのである。医者の療治や特別な薬、家族の手厚い看護の甲斐もなく、シノは若くしてこの世を去った。

天明九年（一七八九）の一月二十五日に改元が施行されて、新たな元号は『寛政』と決まった。その寛政元年の暮れに、忠敬の三女 琴(こと)が生まれる。今回のお産の時は、実家から母親が駆けつけて来て面倒を見てくれていたが、「後はわたしたちが……」と下女たちが心にもないことを言う。母親も長く家を空けてはいられないので、下女たちの言葉を鵜呑みにして伊能家から引き上げて行った。

お産から二、三日後にコウは床上げをして、育児と家事にいそしむ日々に戻った。しかし、三歳と一歳に新生児と、三児を抱えての家事には明らかに無理がある。産後はしばらく安静を保った方が良いことを、彼女が知らなかったという訳ではない。しかし、気丈なコウは下女たちに手助けを求める気にもなれず、下女たちもそっぽを向いたままであった。

産後に休むこともなく働いてきたコウは無理がたたったのであろう、普通であれば一ケ月ほどで治まる悪露(おろ)が、何時まで経っても止まらない。それどころか微熱が続いて、倦怠感も強くなってきた。顔からは血の気が失せ、めまいに襲われることもしばしばで、母乳も殆ど出なくなった。コウはこれまで、少々のことでは弱音を吐いたことなど一度もない。しかし、今度ばかりは普段の暮らしを取り戻すことが出来ず、身体も思うようには動かなくなっていた。

忠敬は、奥向きのことには無頓着であったが、ようやく妻の異変に気が付いた。お産から既に三、四ヶ月も経っていて、コウの衰弱はかなり進んでいた。慌てて掛かりつけの医者を呼び、産婆にも来てもらって療治に取り掛かる。さらに、母乳が出ないため、乳母を探して、しばらくのあいだコトを預かって貰うことにもした。しかし、コウの病状は一進一退を繰り返して、中々恢復の兆しが見えてこない。

春が過ぎて梅雨に入ると、コウの病状は悪化の一途を辿り始めた。食べ物が喉を通らず、そのうえ高熱にもうなさ

れるようにまでなっていた。そして、蒸し暑い六月十八日に、コウは幼い三人の遺児を残して静かに息を引き取った。享年二十六歳。伊能家の当主 忠敬にすべてを捧げ、常に良き妻、良き母であろうと懸命に生きた一生であった。

忠敬は、冷たくなってゆくコウの亡骸を前に、もっと早く気付いてやれば、こんなことには……と悔恨の念に駆られた。そして、心を込めた葬儀を……と思ったが、大変なことに気が付く。コウは入籍をしていなかったので、伊能家として葬儀を出したくてもかなわない。とすれば、葬儀はコウの父親に頼むしか方法はない……と番頭の久兵衛が来るのを待った。

「関場殿、済まない。ワシがもう少し早く気付いていたなら……」

「そんなことはございません。旦那様には十分、良くして貰いました。コウも身に余るほど大事にしていただき、心置きなく逝ったと思います」

「重ねて、誠に申し訳のないことだが、コウの葬式を、お頼み申します」

「分かっておりますゆえ、心配はご無用に」

「重ね重ね済まない。私にはどうにもなりませんので……」

久兵衛 幸七は、配下の者たちに手伝ってもらい、死化粧を済ませたコウを小高い敷地に建つ柏木家まで運んだ。そして、ささやかな葬儀を執り行い、コウの亡骸を観福寺に葬った。彼女の戒名は『妙諦信女』、同じ観福寺にある伊能家の墓からは二～三十間も離れた柏木家の墓所に手厚く葬られ、後に立派な墓碑が幸七の手で建てられることになった。

〈以下、次号〉

【参考資料と謝辞】

本稿の執筆に当たっては、数多くの著書やウェブサイトを参考にさせていただいた。今回は「伊能忠敬研究」の報文に負うところが大きいが、とりわけ『堀田摂津守正敦』（前田由紀子著 第八二号）から、「堀田正敦と桑原隆朝の接点は伊達の下屋敷にあり」と気付かされた時には、大変驚き、興奮を抑えられない程であった。

ここに厚く謝意を表し、御礼を申し上げたい。

【編集後記】

■ここに『文芸 草の丘』第二〇号を発行する運びとなった。創刊以来、年に二回のペースを守ってきたので、丁度十年の節目を迎えたことになる。その間、多くの同人にバラエティに富んだ意欲作を投稿して戴いたことに厚く感謝するとともに、本誌をウェブサイト等でお読み戴いた読者の皆様に心より御礼を申し上げたい。

■今回のコンテンツは、詩とエッセイ、小説の七編である。冒頭に掲載した詩は、中川とらの生命の賛歌ともいえる2作および安達真魚のリズミカルな歌詞3作の構成。エッセイは、安達が千葉ニュータウンの複雑かつ多様な側面を的確に叙述した作、ならびに畑中康郎が3編の映画やテレビドラマについて、感想を印象深く綴った作である。

■小説『道長と伊周(畑中)』は、平安末期に権勢をふるった藤原道長の権力闘争の様を描き、副産物として文人 紫式部らの発掘にも触れている。『不条理な景色(中川)』は固有名詞を消去した影絵のような短編。生きることに内在する不条理をテーマにした連載になると言う。『伊能忠敬と四人の妻-第四回-(香取)』は、忠敬の二番目の妻との結びつきを描き、記録がない妙諦信女に初めて幸(コウ)という名を付けた。また、造り酒屋の主に過ぎなかった忠敬が、寛政の改革で台頭してきた幕府の若年寄と繋がってゆくプロセスを推定している。

〈香取 記〉

【会員と連絡先】

安達 真魚　kiyonori.s@gmail.com
いんば 華子　bach.goldberg-variationen@hotmail.com
香取 淳　katorijun27@gmail.com
中川 とら　nakagawatora1@gmail.com
灰田 隆平　g2b2taka@gmail.com〉,
畑中 康郎　ktakasug@am.em-net.ne.jp

草の丘 第二十号
発行　二〇二一年 六月二十日
編集兼発行人　印旛文学の会　香取 淳
連絡先(携帯)とメール　080-5533-1002
katorijun27@gmail.com
URL　http//bungeikusano-oka.raindrop.jp